Form No. 3389-281 Rev B

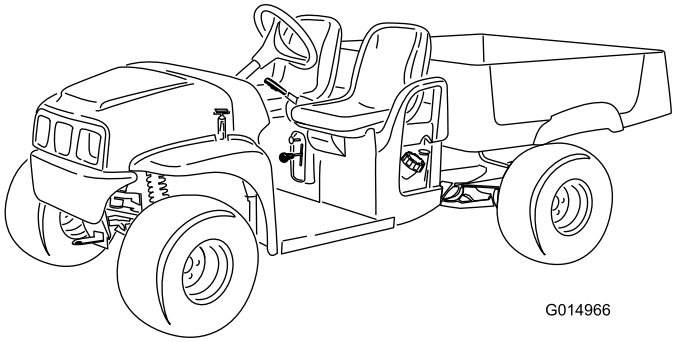
TORO®

Count on it.

オペレーターズマニュアル

Workman® MD および MDX 汎用作業車

モデル番号07266TC—シリアル番号 315000001 以上
モデル番号07273—シリアル番号 315000001 以上
モデル番号07273TC—シリアル番号 315000001 以上
モデル番号07279—シリアル番号 315000001 以上



G014966

製品の登録は www.Toro.com.
この文書は翻訳です。 (JA)

CE

3389-281 B

この製品は、関連するEU規制に適合しています 詳細については、DOC シート規格適合証明書をご覧ください。

⚠ 警告

カリフォルニア州
第65号決議による警告

米国カリフォルニア州では、この製品に、ガンや先天性異常などの原因となる化学物質が含まれているとされております。

カリフォルニア州では、この製品に使用されているエンジンの排気には発癌性や先天性異常などの原因となる物質が含まれているとされております。

重要 この製品のエンジンのマフラーにはスパークアレスタが装着されておりません。カリフォルニア州の森林地帯・潅木地帯・草地などでこの機械を使用する場合には、法令によりスパークアレスタの装着が義務づけられています。他の地域においても同様の規制が存在する可能性がありますのでご注意ください。

この製品に使用されているスパーク式着火装置は、カナダの ICES-002 標準に適合しています。

エンジンの保守整備のため、および米国環境保護局EPA並びにカリフォルニア州排ガス規制に関連してエンジンマニュアルを同梱しております。エンジンマニュアルはエンジンのメーカーから入手することができます。

はじめに

この車両はオフロード用として設計製造されたものであり、公道上を通常走行するためのものではありません。この車両で公道上を走行する場合には、各地域の法令などに従い、また、ヘッドライド、方向指示器、低速走行車両表示など、定められたアクセサリを必ず装備してください。

この機械は専門業務に従事するプロのオペレータが運転操作することを前提として製造された作業用車両です。各種の作業に必要な人や資材を運ぶための車両として作られています。この車両が安全に運ぶことのできる人間は、運転者およびその隣の所定の座席に座る運転助手です。荷台は人を運ぶのに適しておりません。

この説明書を読んで製品の運転方法や整備方法を十分に理解し、他人に迷惑の掛からないまた適切な方法でご使用ください。この製品を適切かつ安全に使用するのはお客様の責任です。

弊社のウェブサイト www.Toro.com で製品やアクセサリ情報の閲覧、代理店についての情報閲覧、お買い上げ製品の登録などを行っていただくことができます。

整備について、また純正部品についてなど、分からないことはお気軽に弊社代理店またはカスタマーサービスにおたずねください。お問い合わせの際には、必ず製品のモデル番号とシリアル番号をお知らせください。図 1 にモデル番号とシリアル番号を刻印した銘板の取り付け位置を示します。いまのうちに番号をメモしておきましょう。

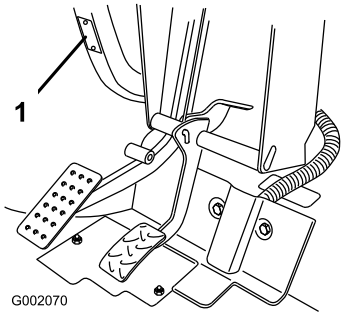


図 1

1. モデル番号とシリアル番号の表示場所

モデル番号_____

シリアル番号 _____

この説明書では、危険についての注意を促すための警告記号図 2を使用しております。死亡事故を含む重大な人身事故を防止するための注意ですから必ずお守りください。



図 2

1. 危険警告記号

この他に2つの言葉で注意を促しています。**重要**「重要」は製品の構造などについての注意点を、**注**はその他の注意点を表しています。

© 2015—The Toro® Company
8111 Lyndale Avenue South
Bloomington, MN 55420

連絡先 www.Toro.com.
Printed in the USA
禁無断転載

目次

安全について 4
安全な運転のために 4
運転の前に 4
管理者の責任 5
燃料の安全な取り扱い 5
運転操作 5
保守 7
モデル 07266TC および 07279 8
モデル 07273 および 07273TC 9
安全ラベルと指示ラベル 9
組み立て 12
1 ハンドルを取り付けるモデル 07266TC と 07273TC 12
2 オイル類の量とタイヤ空気圧を点検する 13
3 マニュアルを読み安全トレーニング資料を見る 13
製品の概要 14
各部の名称と操作 14
仕様 17
アタッチメントとアクセサリ 17
運転操作 18
安全第一 18
荷台の操作 18
始動前の点検を行う 19
ブレーキオイル量の点検 19
エンジンオイルの量を点検する 20
タイヤ空気圧を点検する 22
燃料を補給する 22
エンジンの始動手順 23
車両の停止手順 23
車両の駐車手順 23
新車の慣らし運転 23
荷台への搭載について 23
移動走行を行うとき 24
緊急時の牽引について 25
トレーラを牽引する場合 25
保守 26
推奨される定期整備作業 26
始業点検表 27
整備前に行う作業 28
特殊な使用条件下で使用する場合の保守整備について 28
車両の保守作業を行うための準備 28
マシンを持ち上げる 28
フードへのアクセス 28
潤滑 29
グリスアップ 29
前ホイールベアリングのグリスアップ 30
エンジンの整備 32
エアフィルタの整備 32
エンジンオイルについて 33
点火プラグの整備 35
燃料系統の整備 36
燃料ラインとその接続の点検 36
燃料フィルタの交換 36
カーボンキャニスタの整備 37
電気系統の整備 38
バッテリーの整備 38
ヒューズの交換 39
ヘッドライトの整備 39
走行系統の整備 41
タイヤの保守 41
前輪のトーインとキャンバの調整 41
トランスアクスル・オイルの量の点検 43
トランスアクスルオイルの交換 43
ニュートラルの点検と整備 44
一次走行クラッチの整備 45
冷却系統の整備 45
エンジン冷却部の清掃 45
ブレーキの整備 46
ブレーキの点検 46
駐車ブレーキのハンドルの調整 46
ブレーキケーブルの調整 46
ブレーキオイルの交換 47
ベルトの整備 47
走行ベルトの整備 47
スタータジェネレータベルトの調整 48
シャーシの保守 48
荷台のラッチの整列調整手順 48
洗浄 49
車体を清掃する 49
保管 49

安全について

不適切な使い方をしたり手入れを怠ったりすると、人身事故につながります。 事故を防止するため、以下に示す安全上の注意や安全注意標識のついている遵守事項は必ずお守りください。これは **注意**、**警告**、**危険**など、人身の安全に関わる注意事項を示しています。これらの注意を怠ると死亡事故などの重大な人身事故が発生することがあります。

この機械はSAE J2258規格に適合しています。

安全な運転のために

⚠ 警告

この車両はオフロード専用車両であり、公道や高速道路を走行を前提とした設計製造をおこなっておりません。公道上でこの車両を使用すると危険です。万一事故が起こった場合、死亡や重傷など大きな被害を出す恐れがあります。

この車両で公道を走らないでください。

Workman の安全防災面については十分な配慮のもとに設計し種々のテストを経て製造されておりますが、。安全な御使用のためには、機械や装置の設計や構成だけでなく、それらの運転や整備、保管などの取り扱いに係わる人々の知識、訓練や日常の意識が大変重要です。不適切な使い方をしたり手入れを怠ったりすると、人身事故につながります。

本機はオフロードでの使用を前提として製造された作業用特殊車両であり、。通常の乗用車やトラックとは異なる運転特性を有しておりますので、十分に練習して運転感覚に慣れてください。

ワークマンに取り付け可能なアタッチメントのすべてについて本書で解説することはできません。アタッチメントを取り付けて使用するときには、その装置の *オペレーターズマニュアル* にも十分目を通してください。**マニュアルは必ずお読みください。**

事故を防止するため、以下に示す安全上の注意を必ずお守りください:

運転の前に

- 本機をご使用になる前に必ずこのマニュアルをお読みになり内容をよく理解してくださいマニュアルが足りない場合は、製品のモデル番号とシリアル番号を以下までお知らせくだされば、無料で差し上げますThe Toro® Company, 8111 Lyndale Avenue South, Minneapolis, Minnesota 55420
- 子供に運転させないでください。この車両を運転するためには、少なくとも普通自動車の運転程度の力量は必要です。
- 大人であっても *オペレーターズマニュアル* をよく読んで理解している方以外には絶対に運転させないでください。訓練を受け、許可されている人以外には運転させないでください。肉体的 精神的に十分な能力のない方には、この車両を運転させないでください
- 本機は**運転手1名**以外に所定の**助手席に名**の乗員を乗せることができますこれ以外の場所には**絶対に**人を乗せないでください。
- 操作方法をしっかり身につけ、緊急時にすぐにエンジンを停止できるようになってください。
- **絶対に** アルコールや薬物を摂取した状態で運転や操作をしないでください。医師の処方薬や市販の風邪薬でも眠気を催すことがあります。
- 疲れているときにはこの車両を運転しないでください。運転中も定期的に休憩を取ってください。常に十分な注意力と集中力を発揮できることが非常に重要です。
- 作業には頑丈な靴を着用してください。サンダルやテニスシューズ、スニーカーでの作業は避けてください。だぶついた衣類やアクセサリは機械にからみつく危険があり、人身事故のもとですから着用しないでください。
- 安全メガネ、安全靴、長ズボンおよびヘルメットの着用をおすすめします。地域によってはこれらの着用が条例などで義務付けられています。
- **絶対に** 子供に運転させないでください。大人であっても適切な訓練を受けていない人には**絶対に**運転させないでください。訓練を受け、許可されている人以外には運転させないでください。肉体的 精神的に十分な能力のない方には運転させないでください。
- 作業区域には人、特に子供やペット、を近づけないように注意してください。
- インタロック・システムは使用前に必ず点検してください。スイッチの故障を発見したら必ず修理してから使用してください。
- ガードなどの安全装置やステッカー類は必ず所定の場所に取り付けて使用してください。安全カバーが破損したり、ステッカーの字が読めなくなったりした場合には、機械を使用する前に修理し、ステッカーは新しいものに貼り換えてください。
- 暗くなったら、特に不案内な場所で暗くなったら、運転を控えてください。どうしても暗い場所で運転しなければならない場合は必ずヘッドライトを点灯させ、安全に十分注意してください。場合によっては補助ライトを取り付けてください。
- 作業前には、車体やアタッチメントの各部を必ず点検してください。異常がある場合は使用を**中止してください。**必ず、使用する前に修理や調整を行って問題を解決しておいてください。
- 燃料容器は必ず規格認可されている非金属製のものを使用してくださいアースされていない容器の場合、静電気による燃料蒸気への着火の危険があります。容器に給油する時には燃料容器を荷台から地面に下ろし車体から離して置いてください。また、ホースのノズルを容器に接触さ

せた状態で給油してください。給油前に、車両の荷台からマシンを地面に降ろしてください。

- 屋外または換気のよい場所以外では本機を運転しないでください。

管理者の責任

- オペレータに対して適切な訓練を行い、*オペレーターズマニュアル*、エンジンマニュアル、および機体に貼付されているステッカーの内容を熟知させてください。
- 特殊な場所例えば車両での乗り入れが安全でない斜面などのための作業手順や安全確認規則をきちんと作成し、全員がそれを守って作業を行うよう徹底してください。

燃料の安全な取り扱い

- 人身事故や物損事故を防止するために、ガソリンの取り扱いには細心の注意を払ってください。ガソリンは極めて引火しやすく、またその気化ガスは爆発性があります。
- 燃料取り扱い前に、引火の原因になり得るタバコ、パイプなど、すべての火気を始末してください。
- 燃料の保管は必ず認可された容器で行ってください。
- エンジン回転中やエンジンが熱い間に燃料タンクのふたを開けたり給油しないでください。
- 給油はエンジンが十分に冷えてから行ってください。
- 屋内では絶対に給油しないでください。
- ガス湯沸かし器のパイロット火やストーブなど裸火や火花を発するものがある近くでは、絶対に機械や燃料容器を保管格納しないでください。
- トラックの荷台に敷いたカーペットやプラスチックマットなど絶縁体の上で燃料の給油をしないでください。ガソリン容器は車から十分に離し、地面に直接置いて給油してください。
- 給油は、機械をトラックやトレーラから地面に降ろし、機体を接地させた状態で行ってください。機械を車両に搭載したままで給油を行わなければいけない場合には、大型タンクのノズルからでなく、小型の容器から給油してください。
- 給油は、給油ノズルを燃料タンクの口に接触させた状態を維持して行ってください。ノズルを開いたままにする器具などを使わないでください。
- もし燃料を衣服にこぼしてしまった場合には、直ちに着替えてください。
- 絶対にタンクから燃料をあふれさせないでください。給油後は燃料タンクキャップをしっかりと締めてください。

運転操作

- 運転中は必ず全員が着席し、シートベルトを着用てくださいオペレータは、可能な限り両手でハンドルを握り、助手席の人は必ず安全手すりを握ってください。また、手足を車外に出さないようしてください。
- 助手席に人を乗せている時はハンドル操作はゆっくりと行ってください。助手席の人はブレーキや急ハンドルに無警戒であることが多いのでオペレータからの十分な配慮が必要です。荷台やアタッチメントの上には絶対に人を乗せないでください。
- 過積載は絶対にやめてください。 銘板ダッシュボード中央の下側にありますで、積載限度を確認してください。アタッチメントにも過負荷を掛けないでください また、所定の車両総重量GVWの範囲内で使用してください。
- エンジンを始動させるときには
  - 運転席に座り、駐車ブレーキが掛かっているのを確認する。
  - ブレーキを踏んだまま、
  - ON/OFF スイッチを ON にする。

    注 アクセルペダルを踏むとエンジンが始動する。
- 運転には十分な注意が必要です安全への注意がおろそかになると、転倒など思わぬ事故となり、けがや死亡など重大な結果を招きます。運転は常に慎重に。転倒や暴走事故を防止するために以下の点にご注意ください
  - バンカーや川、減速ランプ、不案内な場所などでは必ず減速し、安全距離を取り、十分な注意をはらう。
  - 隠れた穴などの見えない障害に警戒を怠らないでください。
  - 急な斜面を走行する場合には安全に特に注意する。斜面では通常はまっすぐに上るか下るかする。小さな旋回をする時や斜面で旋回を行う時には必ず減速する斜面での旋回は可能な限り避ける。
  - ぬれた場所、スピードが出ている時、満載状態などでの運転には十二分の注意を払う。満載状態では停止時間が長くなることを忘れずに。
  - 荷台に積み込む時は、荷重が均等になるように分散させること。荷物が荷台からはみ出る場合には特に注意が必要。また、重心が偏っていて荷台の中心に重心がこない物を運ぶ場合には特に注意が必要。なるべくバランス良く積み、ずれないように配慮する。
  - 急停止や急発進をしないこと。後退から前進、あるいは前進から後退への切り替えは、完全に停止する。

  - 急旋回など突然の操作は、その後の運転制御が不安定になりやすく事故のもとであるから行わない。
  - 交差点や曲がり角などの危険箇所で他の車両の追い抜きをしない。
  - ダンプするときは後方に人がいないのを必ず確認する。人の足元にダンプしないこと。テールゲートのラッチを外す時は車の後ろでなく横に立って行う。
  - 無用の人間を近づけない。バックするときには、後方の安全に注意し、車両の後部に人がいないことを十分に確認する。後退時は速度を落とす。
  - 道路付近で作業するときや道路を横断するときは周囲の交通に注意する。歩行者や他の車両に対し、常に道を譲る心掛けをもつ。右左折などの進路表示は常に早めに行い、他車の注意を喚起すること。その他交通ルールを守って運転する。
  - 爆発性のチリやガスが空気中に含まれている所では絶対にこの車を運転しない。爆発性の物質が空気中に存在する所では本機の電気系統や排気系統からの火花が爆発を引き起こす可能性がある。
  - 頭上の危険物に注意し、低く垂れ下がった木の枝、門、歩道橋などの下を通り抜けるときは安全を必ず確認してください。
  - 安全に確信が持てない時は**車両の運転を中止**し、責任者に報告する。
- 運転席を離れる前に
  - マシンの動作を完全に停止させる。
  - 荷台を降下させる。
  - エンジンを停止し、すべての動作の停止を確認する。
  - 駐車ブレーキを掛ける。
  - ON/OFF スイッチからキーを抜き取る。
- エンジンの回転中や停止直後は、エンジン本体、トランスミッション、ラジエター、マフラー、排気管などに触れると火傷の危険がありますから手を触れないでください。
- 万一、車体が異常な振動をした場合は、直ちに車両を停止させ、エンジンを止め、機械の全動作が停止するのを待ち、それから点検にかかってください。破損部は必ず修理交換してから作業を再開してください
- 機械が落雷を受けると最悪の場合死亡事故となります。稲光が見えたり雷が聞こえるような場合には機械を運転しないで安全な場所に避難してください。

ブレーキ操作

- 障害物に近づく前に十分減速してください。これにより、停止や回避のための余裕が生まれます。衝突事故は、ご自身や同乗者を負傷させる恐れがあります。さらに、車両や衝突相手の機材を損傷してしまいます。
- 車両総重量は停止距離や旋回限界に大きな関係があります。積載重量が大きいときには停止も旋回も難しくなります。積載重量が大きいほど停止に掛かる時間が長くなります。詳細については 荷台への搭載について (ページ 23)の項を参照してください。
- 荷台を外して車両後部に何も装着しないで運転する場合にはスピードを控えめにしてください。 車両後部が軽いとブレーキを掛けたときに後輪がロックしやすくなって危険です。
- ターフも普通の路面も、ぬれているときには非常に滑りやすくなります。停止距離も、路面が乾いているときの2倍から4倍の長さが必要になります。また、深い水溜りに入ってブレーキがぬれると、乾燥するまでブレーキが利かなくなります。水溜りを抜けたあとは速度を落としてブレーキテストをしてください。ブレーキが利かなくなっていたら、平らな場所で、ブレーキペダルを軽く踏み込んだまましばらく低速で運転しましょう。こうするとブレーキが早く乾きます。

斜面での運転

⚠ 警告

斜面では転倒しやすくなる上、斜面を登りきれないときにはエンジンが停止してしまう場合もあります。あわてると人身事故を起こす危険があります。

- **急斜面に乗り入れないこと。**
- **下り坂で、特に荷を積んでいる場合には、急加速や急ブレーキをしないでください。**
- **斜面でバッテリー切れを起こすなど、斜面を登りきれなくなった場合には、バックでまっすぐ下る。決して旋回しようとしないこと。**
- **斜面では速度を十分に落とし、慎重に運転すること。**
- **斜面上での旋回は避けてください。**
- **積荷をなるべく軽くし、速度を落として運転してください。**
- **斜面での停止、特に荷を積んだままでの停止は避けてください。**

斜面では、さらに以下に述べるような点にも注意が必要です。

- 斜面の手前上る前や下る前では、減速してください。
- 坂を登りきれないでエンストしたり、エンストしそうになったりした時はまず落ち着いてゆっくりとブレーキを踏み、必ずバックでまっすぐに ゆっくりと下がってください

- 斜面を走行しながらの旋回は危険です。斜面でどうしても旋回しなければいけないときは、十分に減速し、慎重に操作してください。絶対に急旋回や小さなターンをしないでください。
- 車両重量が大きいときは斜面での安定性が悪くなります。斜面で運転する時や重心の高いものを積んで走る時には重量をなるべく軽くし、速度を落として運転してください。 荷台に資材を積む場合には、荷崩れを起こさないようにしっかりと固定してください。特に、荷崩れしやすいもの液体、石、砂などは十分固定してください。
- 斜面での停止、特に荷を積んだままでの停止は避けてください。下り坂では平地に比べて停止に長い距離が必要になります。どうしても斜面で停止しなければならない場合には、急停止による転倒の危険を避けるために慎重に車両を制御してください。 バックで斜面を下っているときに急ブレーキを掛けると後方に転倒する危険が高くなります。
- この車両を法面で使用する場合には、ROPS キットオプションの取り付けをご検討ください。

不整地での運転

⚠ 警告

路面の急変化が起こるとハンドルが突然回転し、手や腕にけがをする場合がある。

- **凹凸のある場所での走行や縁石を乗り越えるときなどは減速する。**
- **ハンドルは円周部をやわらかく握り、両親指がスポークから離れて上向きになるように保持する。**

不整地、ラフ、凹凸のある場所、縁石の近く、穴の近くなど路面が一定でない場所では必ず減速してください。また、そのような場所を走行する場合には、積荷を減らしてください。車体が揺れると重心が移動し、運転が不安定になります。

この車両を不整地で使用する場合には、ROPS キットオプションの取り付けをご検討ください。

積荷の安全な積み下ろし

⚠ 警告

荷台は相当の重さになる。 万一手などを挟まれると大けがをする。

- **荷台を降ろすときには、荷台に手やその他の部分を近づけないよう十分注意すること。**
- **周囲に人がいる場所でダンプ操作をしない。**
- 荷台に荷物を積んで運転するときや、トレーラなどの牽引を行う場合、またこれらを同時に行う場合には、定格積載重量や定格牽引重量を守ってください。仕様 (ページ 17)を参照。
- 法面や不整地で運転する場合には、より一層の注意を払ってください。特に、荷台に荷物を積んで運転しているときや、トレーラなどを牽引しているときは慎重に運転してください。
- 背の高い荷物を積んで走行する場合も一層の注意が必要です。
- 積載方法重量配分が不適切であると、車両が不安定になり、運転が難しくなります。
- また、荷台からはみ出すように積載した場合も、車両の安定性が損なわれます。
- 積荷の重量が荷台に固定されていないたとえば液体の入った大きなタンクを積んだ場合などと、ステアリング、ブレーキ、全体的な走行安定性が悪くなります。
- 斜面を横切るように駐車したでは、絶対にダンプ操作をしないでください。 重心の急変により車両が転倒する危険があります。
- 重い積荷を積んで走行しているときには、速度に注意し、常に安全な停止距離を確保してください。 急ブレーキは絶対につつしみましょう。斜面ではより慎重な運転を心がけましょう。
- 重い物を積んでいるときは停止距離が長くなり転倒しやすくなっていることを忘れないでください。
- 荷台は荷物専用のスペースです。人を乗せないでください。
- 過積載は絶対にやめてください。 銘板ダッシュボード中央の下側にありますで、積載限度を確認してください。アタッチメントにも過負荷を掛けないでください また、所定の車両総重量GVWの範囲内で使用してください。荷台への搭載について (ページ 23)を参照。

保守

- 整備・調整作業の前には平らな場所を選び、作業中に誤ってエンジンが掛かることのないよう、必ずエンジンを停止し駐車ブレーキを掛け、ON/OFFスイッチからキーを抜いておいてください
- 荷台を上昇させた状態で整備などをする場合には、必ず昇降用油圧シリンダを一杯に伸ばした状態とし、安全サポートで固定してください。
- 油圧を掛ける前に、油圧ラインやホース、フィッティングに傷や変形がないか、接続部が確実に締まっているかを確認してください。
- 油圧のピンホールリークやノズルからは作動油が高圧で噴出していますから、手などを近づけないでください。リークの点検には**絶対に手を直接差し入れたりしない**でください。新聞紙やボール紙を使ってください。高圧で噴出する作動油は皮膚を貫通し、身体に重大な損傷を引き起こします。万一、油圧オイルが体内に入った場合には、この種の労働災害に経験のある施設

で数時間以内に外科手術を受けないと壊疽を起こします。

- 油圧系統の整備作業を行う時は、必ずエンジンを停止し、油圧昇降バルブの上昇・下降操作を何度か繰り返す、荷台やアタッチメントの上昇・下降を何度か繰り返すなどしてシステム内部の圧力を完全に解放してください。リモート油圧装置が装備されている場合には、レバーを平らに寝た状態にセットしてください。荷台を上げた時には、必ず安全サポートで荷台を支えてください。
- ボルト、ナット、ネジ類は十分に締めつけ、常に機械全体の安全を心掛けてください。
- 火災防止のため、エンジンの周囲に、余分なグリス、草や木の葉、ほこりなどが溜まらないようご注意ください。
- エンジンを回転させながら調整を行わなければならない時は、手足や頭や衣服を可動部に近づけないように十分ご注意ください。また、無用の人間を近づけないようにしてください
- ガバナの設定を変えてエンジンの回転数を上げないでください本機の最高回転数は 3650 RPM です。Toro正規代理店でタコメータによるエンジン回転数検査を受け、安全性と精度を確認しておきましょう。
- 大がかりな修理が必要になった時や補助が必要な時は、Toro 正規代理店にご相談ください。
- いつも最高の性能を維持するために、必ずトロの純正部品をご使用ください。他社の部品やアクセサリを使用すると危険な場合があります。この車両の改造を行うと、機械の挙動や性能、耐久性などが変化し、そのために事故が起きる可能性があります。このような使い方をするとToro® の製品保証が適用されなくなります。
- Toro® 社の了承なく本機を改造しないでください。お問い合わせはすべてこちらへThe Toro® Company, Commercial Division, Vehicle Engineering Dept., 8111 Lyndale Ave. So., Bloomington, Minnesota 55420–1196 USA.

モデル 07266TC および 07279

音力

この機械は、音力レベルが 96 dBA であることが確認されています ただしこの数値には不確定値K1 dBA が含まれています。

音力レベルの確認は、EN ISO 11094 に定める手順に則って実施されています。

音圧

この機械は、オペレータの耳の位置における音圧レベルが 83 dBA であることが確認されています ただしこの数値には不確定値K1 dBA が含まれています。

音圧レベルの確認は、EN ISO 規則 11201 に定める手順に則って実施されています。

腕および手の振動

右手の振動レベルの実測値 = 1.5 m/s^2

左手の振動レベルの実測値 = 1.03 m/s^2

不確定値K = 0.5 m/s^2

実測は、EC規則 1032 に定める手順に則って実施されています。

全身の振動

振動レベルの実測値 = 0.42 m/s^2

不確定値K = 0.5 m/s^2

実測は、EC規則 1032 に定める手順に則って実施されています。

モデル 07273 および 07273TC

音力

この機械は、音力レベルが 96 dBA であることが確認されています ただしこの数値には不確定値K1 dBA が含まれています。

音力レベルの確認は、EN ISO 11094 に定める手順に則って実施されています。

音圧

この機械は、オペレータの耳の位置における音圧レベルが 86 dBA であることが確認されています ただしこの数値には不確定値K1 dBA が含まれています。

音圧レベルの確認は、EN ISO 規則 11201 に定める手順に則って実施されています。

腕および手の振動

右手の振動レベルの実測値 = 1.5 m/s^2

左手の振動レベルの実測値 = 1.06m/s^2

不確定値K = 0.5 m/s^2

実測は、EC規則 1032 に定める手順に則って実施されています。

全身の振動

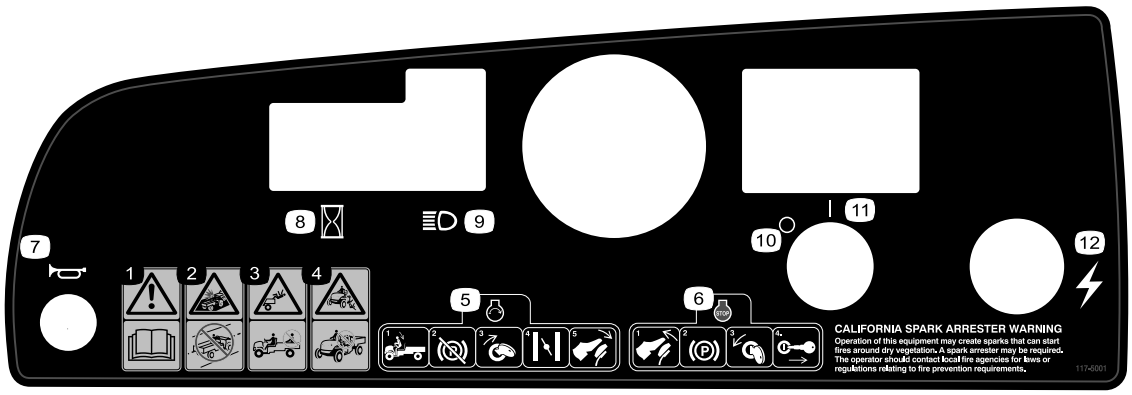
振動レベルの実測値 = 0.35m/s^2

不確定値K = 0.5 m/s^2

実測は、EC規則 1032 に定める手順に則って実施されています。

安全ラベルと指示ラベル

以下のラベルや指示は危険な個所の見やすい部分に貼付してあります。 読めなくなったものは必ず新しいものに貼り替えてください。



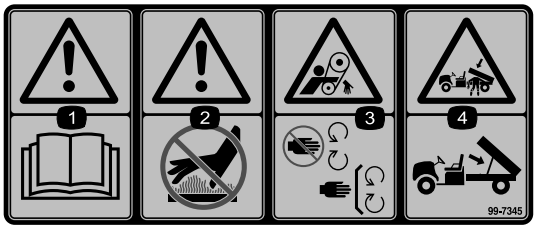
117-5001

1. 警告 — *オペレーターズマニュアル*を読むこと。
2. 衝突の危険 — 公道上を走行しないこと。
3. 落下危険荷台に人を乗せないこと。
4. 落下の危険 — 子供に運転させないこと。
5. モータの始動手順着席し、駐車ブレーキを解除し、キーをON位置に回しアクセルペダルを踏み込む。
6. エンジンの停止手順アクセルペダルから足をはなし、駐車ブレーキを掛け、キーを OFF 位置に回して抜き取る。
7. ホーン警笛
8. アワー・メータ
9. ヘッドライト
10. パワー — Off
11. パワー — On
12. 電気ソケット



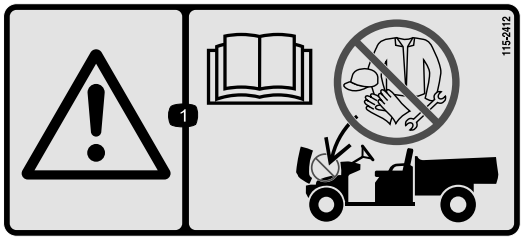
104-6581

1. 警告 *オペレーターズマニュアル*を読むこと。
2. 火災の危険 燃料補給前にエンジンを止めること。
3. 警告講習を受けてから運転すること。
4. 転倒の危険 斜面を走る時や旋回する時は速度を落として慎重に運転すること。大量の荷物または重い荷物を積んでいる時、凹凸の激しい場所では最高速度26 km/h 以下で走行すること。
5. 転落や手足の負傷の危険 荷台に人を乗せないこと。手足を車両外に出さないこと



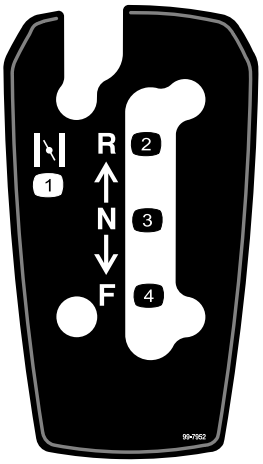
99-7345

1. 警告 *オペレーターズマニュアル*を読むこと。
2. 表面が熱い・火傷の危険 近づかないこと。
3. ベルトに巻き込まれる危険 可動部に近づかないこと。すべてのガード類を正しく取り付けて使用すること。
4. 荷台に押しつぶされる危険 支え棒で荷台を支えること。



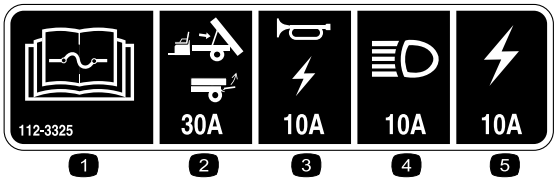
115-2412

1. 警告 *オペレーターズマニュアル*を読むことここに物を収納しないこと。



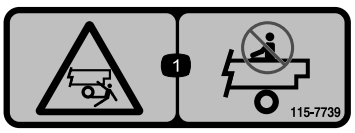
99-7952

1. チョーク
2. 後退
3. ニュートラル
4. 前進



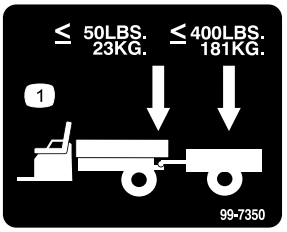
112-3325

1. ヒューズに関する情報は*オペレーターズマニュアル*を参照のこと。
2. 昇降/ゲート, 30 A
3. ホーン/電源ソケット, 10 A
4. ヘッドライト, 15 A
5. 本体ヒューズ、20 A



115-7739

1. 転落、衝突、周囲の人への危険 人を乗せないこと。



99-7350

1. トングの最大重量は 23 kgトレーラの最大重量は 181 kg。

組み立て

付属部品

すべての部品がそろっているか、下の表で確認してください。

手順	内容	数量	用途
1	ハンドル	1	ハンドルを取り付けるモデル 07266TC と 07273TC のみ
2	必要なパーツはありません。	–	オイル類の量とタイヤ空気圧を点検します。
3	オペレーターズマニュアル エンジンマニュアル パーツカタログ 安全講習資料 登録カード PDI納品前検査票 品質検査証明書 キー	1 1 1 1 1 1 1 2	実際に運転を始める前にオペレーターズマニュアル を読みトレーニング資料をご覧になってください。

注 前後左右は運転位置からみた方向です。

1

ハンドルを取り付けるモデル 07266TC と 07273TC

この作業に必要なパーツ

1	ハンドル

手順

1. ハンドルの裏側にある開口部から、センターカバーのロックタブを外し、ハンドルからカバーを外す (図 3)。

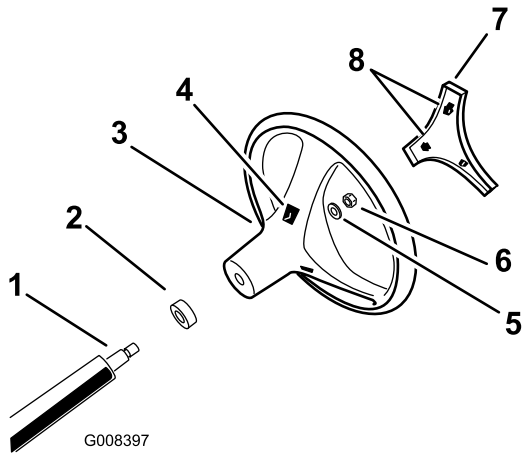


図 3

1. ハンドルシャフト
2. ダストカバー
3. ハンドル
4. ハンドルについているタブ耳用のスロット
5. ワッシャ
6. ロックナット
7. センターカバー
8. 開口部タブを外すための穴

2. ステアリングシャフトからロックナットとワッシャを外す図 3。
3. ハンドルをステアリング シャフトのスプラインに合わせる (図 3)。

   注 タイヤがまっすぐ前方を向いている時にハンドルのクロスビーム(横棒が水平となり太いスポークが下を向くようにしてハンドルを取り付けてください。
4. ワッシャとロックナットねじをステアリングに組み付ける (図 3)。

5. ロックナットを 24-29 N·m 2.5-3.0 kg.m=18-22 ft-lbにトルク締めする。
6. センターカバーのロックタブを、ハンドル中央部の開口部に合わせて、カバーがパチンと音をたててロックするまで押し込む (図 3)。

2

オイル類の量とタイヤ空気圧を点検する

必要なパーツはありません。

手順

1. エンジンを初めて作動させる前と後に、エンジンオイルの量を点検する エンジンオイルの量を点検する (ページ 20)を参照。
2. エンジンを初めて作動させる前に、ブレーキオイルの量を点検する ブレーキオイル量の点検 (ページ 19) を参照。
3. エンジンを初めて作動させる前に、トランスアクスルのオイル量を点検する トランスアクスル・オイルの量の点検 (ページ 43)を参照。
4. タイヤ空気圧を点検する タイヤ空気圧を点検する (ページ 22)を参照。

3

マニュアルを読み安全トレーニング資料を見る

この作業に必要なパーツ

1	*オペレーターズマニュアル*
1	エンジンマニュアル
1	*パーツカタログ*
1	安全講習資料
1	登録カード
1	*PDI納品前検査票*
1	品質検査証明書
2	キー

手順

- *オペレータズマニュアル*やエンジンマニュアルをよくお読みください。
- 安全講習資料を見る。
- 登録カードに記入する。
- *納品前検査証明書*の必要個所にご記入ください。
- *品質検査証明書*をご確認ください。

製品の概要

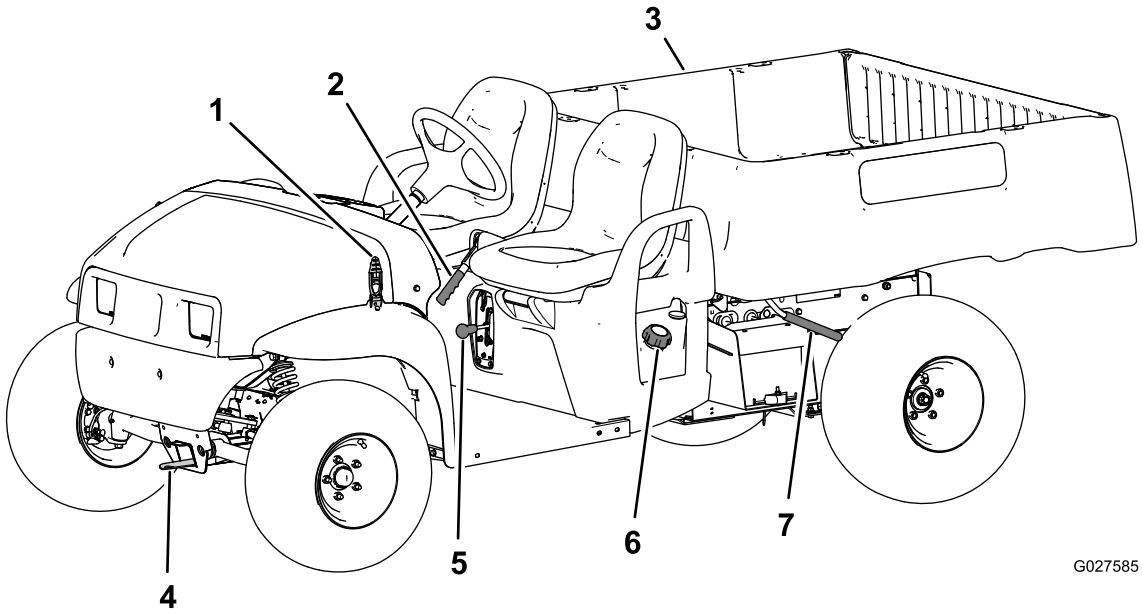


図 4

1. フードのラッチ
2. 駐車ブレーキハンドル
3. 荷台
4. 牽引用トング
5. ギアシフトセレクタ
6. 燃料キャップ
7. 荷台用レバー

各部の名称と操作

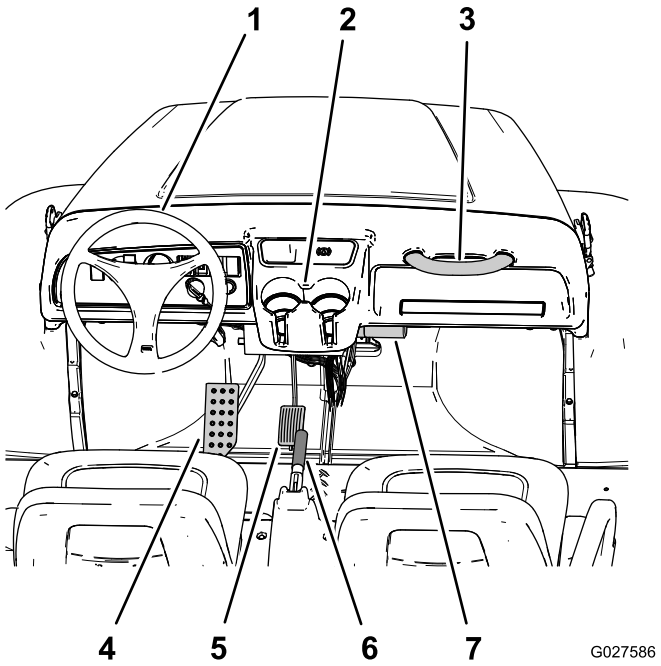


図 5

1. ハンドル
2. カップホルダー
3. 助手席用手すり
4. ブレーキ・ペダル
5. アクセルペダル
6. 駐車ブレーキハンドルセンターコンソール
7. *オペレーターズマニュアル* 保管チューブ

アクセルペダル

アクセルペダル図 5は、車両の走行速度を調整するペダルです。アクセルペダルを踏み込むと走行を開始します。 ペダルをさらに踏み込むと走行速度が上がります。 踏み込みをゆるめると走行速度が下がり、ペダルから足を離すと走行を停止します。

注 最高速度前進時は 26 km/h です。

ブレーキペダル

速度を下げたり停止するのに使用します図 5。

⚠ 注意

ブレーキが摩耗したり正しく調整されていなかったりすると人身事故を起こす危険がある。

ブレーキペダルを一杯に踏み込んだ時、ペダルと運転台の床との距離が 25mm 以下となるようなら調整または修理が必要です。

駐車ブレーキレバー

駐車ブレーキレバーは左右の座席の間にあります 図 4と図 5。エンジンを停止させる時には、車体が不意に動き出さないよう、必ず駐車ブレーキを掛けてください。駐車ブレーキレバーを後ろに引けばブレーキがかかります。レバーを前に倒すと駐車ブレーキが解除されます。急な斜面に停車する場合にも、必ず駐車ブレーキを掛けてください。

チョークコントロール

運転席右の下側に配置されています。冷えているエンジンを始動するときには、チョークを引き出してエンジンの始動を補助してください図 6。エンジンが始動したら、エンジンがスムーズに回転を続けられるように調整してください。エンジンが始動して暖まるのに合わせて、チョークを徐々にOFF位置に戻します

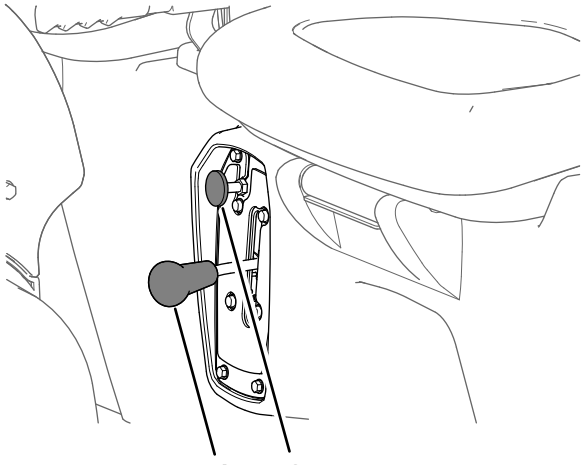


図 6

1. チョークコントロール
2. ギアシフトセレクタ

ギアシフトセレクタ

ギアシフトセレクタは左右の座席の間、駐車ブレーキレバーの下にあります。ギアシフトセレクタには3つの位置があります 前進、後退、ニュートラルです図 6。

注 どの位置でもエンジンの始動が可能です。

重要 ギア位置を変更するときには必ず車両を停車してください。

ホーンボタンモデル 07266TC および 07273TC

ホーンボタンはダッシュボードの左下コーナー部にあります (図 7)。押すと警笛がなります。

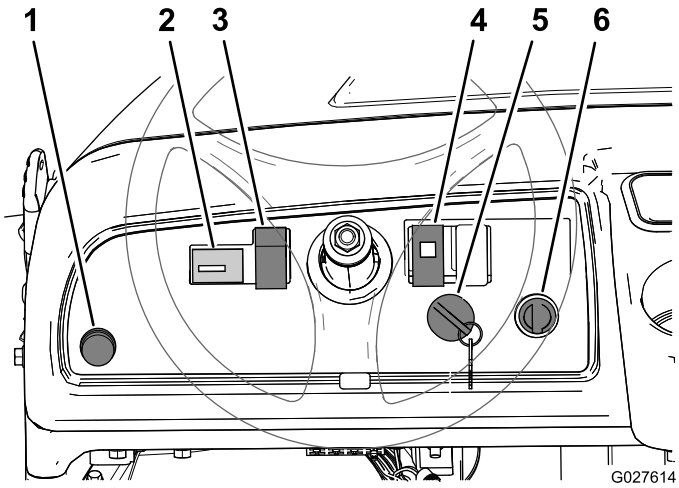


図 7

1. ホーンボタン モデル 07266TC および 07273TC
2. アワー・メータ
3. ライト・スイッチ
4. オイル圧警告灯
5. 電源ソケット
6. On/Off スイッチ

ライトスイッチ

ライトスイッチはハンドルシャフトの左側にあります (図 7)。ヘッドライトの点灯と消灯を行います。スイッチの上側を押すと点灯、下側を押すと消灯します。

アワーメータ

アワーメータはライトスイッチの左側にあります (図 7)。エンジンの積算運転時間を表示します。アワーメータは始動スイッチをON位置にすると始動し、エンジンが回転している間作動を続けます。

エンジンオイル圧警告灯

エンジンオイル圧警告灯はハンドルシャフトの右側にあります (図 7)。エンジンオイルの圧力が危険域に低下すると点灯します。このランプが点灯したままのときはエンジンを止め、オイル量を点検してください。そして必要に応じてオイルを補給してください エンジンオイルの量を点検する (ページ 20)を参照。

注 このランプが点滅する場合がありますが、これは正常な状態で、特別な処置は不要です。

On/Off スイッチ

ON/OFFスイッチ(図 7)はエンジンの始動と停止を行うスイッチで、2 つの位置がありますON と OFF です。右に回すとON となって運転ができるようになります。使用を終了してエンジンを止めるときには、キーを左に回して OFF にしてください 車両から離れるときは、キー抜き取ってください。

電源ソケット

電源ソケットは On/Off スイッチの右側にあります (図 7)。12Vのオプション機器の電源として使用できます。

燃料計

燃料計図 8は機体左側、燃料タンクのキャップの横にあります。燃料タンクに残っている燃料の量を表示します。

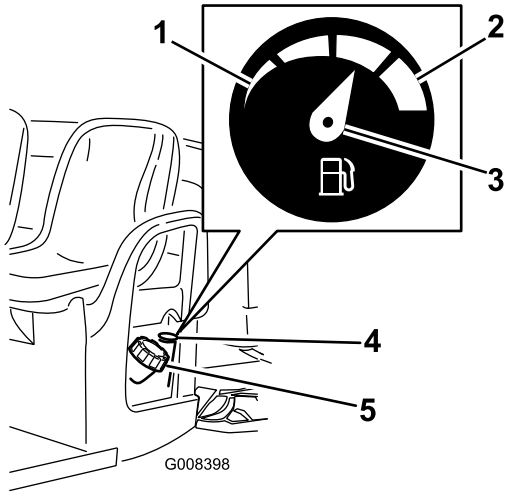


図 8

1. なし
2. 満タン
3. 指示針
4. 燃料計
5. 燃料タンクのキャップ

手すりと腰部ガード

助手席用の手すりと腰部ガードが、ダッシュパネルの右側と各座席の外側についています図 9。

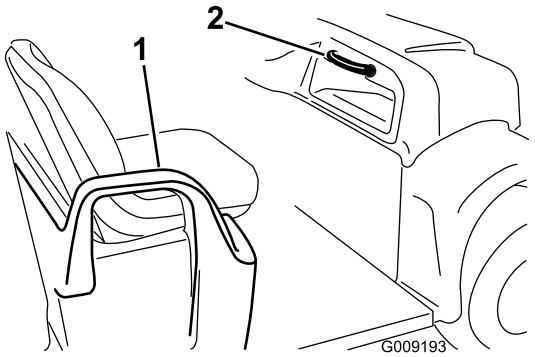


図 9

1. 手すり･腰部ガード
2. 助手席用手すり

仕様

注 仕様および設計は予告なく変更される場合があります。

タイプ	モデル 07266TC および 07279	モデル 07273 および 07273TC
ベース重量	乾燥重量 544 kg	
定格容量平坦路面の場合	総重量 567 kgオペレータおよび助手席乗員の体重をそれぞれ 90.7 kg とし、積載物、トレーラトング重量、トレーラの総重量、アクセサリの重量を含む	総重量 749 kgオペレータおよび助手席乗員の体重をそれぞれ 90.7 kg とし、積載物、トレーラトング重量、トレーラの総重量、アクセサリの重量を含む
最大車両重量平坦地で	1,111 kg上記重量を全て含む	1,292 kg上記重量を全て含む
最大積載量平坦路面の場合	385 kg トレーラトング重量とトレーラの総重量を含む	567 kg トレーラトング重量とトレーラの総重量を含む
牽引能力 標準ヒッチ ヘビーデューティーヒッチ	 トングの最大重量は 23 kgトレーラの最大重量は 182 kg トングの最大重量は 45 kgトレーラの最大重量は 363 kg	
全幅:	150cm	
全長	299cm	
地上高	25cm車両前部乗員や荷物を乗せない18cm車両後部乗員や荷物を乗せない	
ホイールベース	206cm	
トレッドセンターライン間	125cm前、118cm後	125cm前、120cm後
荷台長さ	117cm内法、133cm外側寸法	
荷台幅	125cm内法、150cm外側寸法フェンダの外側で計測	
荷台高さ	25cm内法	

アタッチメントとアクセサリ

トロが認定した各種のアタッチメントやアクセサリがそろっており、マシンの機能をさらに広げることができます。 詳細は弊社の正規サービスディーラ、または代理店へお問い合わせください弊社のウェブサイト www.Toro.com でもすべての認定アタッチメントとアクセサリをご覧になることができます。

運転操作

注 前後左右は運転位置からみた方向です。

安全第一

このマニュアルに記載されている安全上の注意やステッカーの表示内容を良く読んでください。この機械についてよく知っておくことがあなた自身や周囲の人を事故から守ることにつながります。

荷台の操作

荷台を上げる

⚠ 警告

荷台を上昇させたままで走行すると転倒の危険が増大する。 また、荷台を上昇させたままで走行すると荷台が破損する危険もある。

- **運転する時は必ず荷台を下げておくこと。**
- **ダンプ操作を終えたらすぐに荷台を下げるようにする。**

⚠ 注意

荷台の後部に積荷が集中していると、ラッチを開けた際に荷台が急に開いて周囲の人間が怪我をする恐れがある。

- **積荷はでき限り荷台の中央に載せる。**
- **ラッチを開放する際には、荷台を手でしっかりと押さえ、荷台に寄りかかっている人間や荷台のすぐ後ろに人がいないことを確認する。**
- **整備のために荷台を上昇させる際には、積荷をすべて降ろす。**

1. 荷台の前側の角部ちかくにあるラッチレバーを持ち上げて、荷台を上昇させる図 10。
2. 荷台が上がったら、車体の左側ブレームについている支え棒を、荷台の底部についているスロットの奥までいれて荷台を支える図 10。

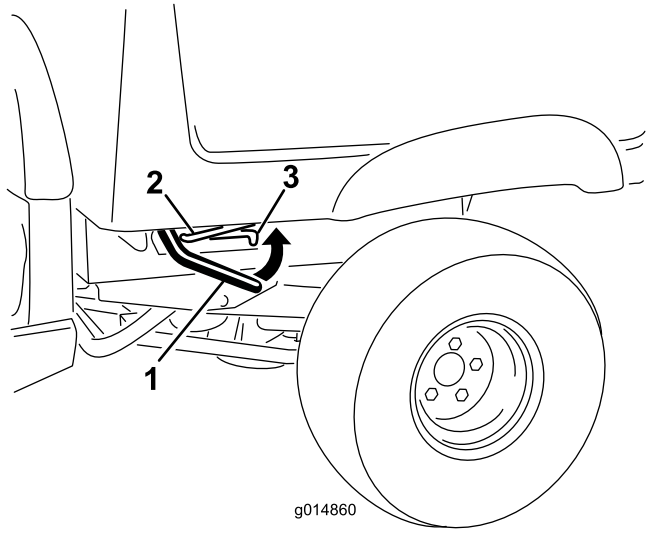


図 10

1. ラッチレバー
2. 支え棒プロップロッド
3. ロック位置スロット

荷台を下げる

⚠ 警告

荷台は相当の重さになる。 万一手などを挟まれると大けがをする。

荷台を降ろすときには、荷台に手やその他の部分を近づけないよう十分注意すること。

1. ラッチバーを引き上げて荷台をかるく持ち上げる図 10)。
2. 荷台の底部のスロットにはめ込んであった支え棒を外す図 10。
3. ラッチがかかるまで荷台を確実に降ろす図 10。

テールゲートの操作

1. 荷台が完全に降りていてラッチが掛かっていることを確認する。
2. テールゲートのバックパネルについているフィンガープルを持ち上げる図 11。

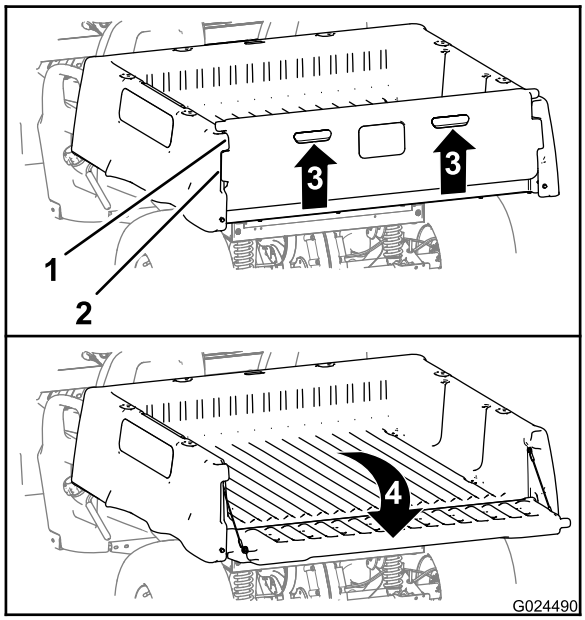


図 11

1. テールゲートフランジ荷台
2. ロックフランジテールゲート
3. 持ち上げ部フィンガープル
4. 後方に倒す

3. テールゲートのロックフランジを、荷台のテールゲートフランジの開口に合わせる図 11。
4. テールゲートを後方に倒す図 11。

テールゲートの閉め方

テールゲートを開いて砂、砂利、木材チップなどの資材を降ろした後は、テールゲートの蝶番部分にこれらの資材が残っている場合がある。テールゲートを閉める前に、以下を行うようにする。

1. 蝶番部分に残っている砂などを手で除去する。
2. テールゲートを 45°程度の角度にする図 12。

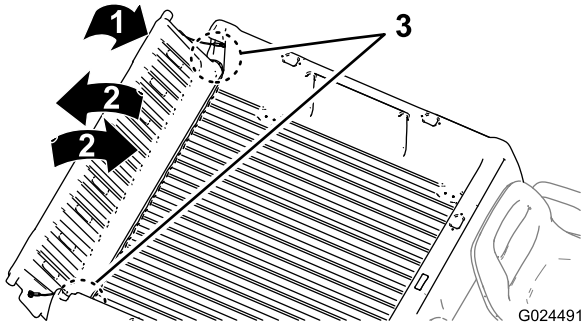


図 12

3. この位置から、テールゲートを小刻みに前後に振るように数回往復させる図 12。

注 この動作によって蝶番部分からさらに砂などが除去されます。

4. テールゲートを元のように開いて、蝶番部分に砂などが残っていないかチェックする。
5. 蝶番部分に残っている砂などが完全になくなるまで、ステップ 1 - 4 を繰り返す。
6. テールゲートを立てて閉じ、ロックフランジテールゲート側がテールゲートポケット荷台側と面一になるようにする図 11。

   注 テールゲートを前後に動かして、ロックフランジテールゲート側をテールゲートフランジの間にある縦溝に合わせる。
7. 荷台の背部まで、テールゲートを下る図 11。

   注 この状態で、テールゲートのロックフランジは、荷台のテールゲートフランジによって完全に固定される。

始動前の点検を行う

整備間隔: 使用するごとまたは毎日 毎日、運転前に以下の項目を点検してください。

- ブレーキオイルの量を点検し、必要に応じて追加する ブレーキオイル量の点検 (ページ 19)を参照。
- エンジンオイルの量を点検し、必要に応じて追加する エンジンオイル量の点検 (モデル 07273 と 07273TC) (ページ 21)を参照。
- タイヤ空気圧を点検する タイヤ空気圧を点検する (ページ 22)を参照。
- ブレーキペダルの作動を点検する。
- ヘッドライトが正常に作動することを確認する。
- ハンドルを左右一杯に切って応答を確認する。
- オイル漏れや各部のゆるみなどの異常がないか点検する。

  注 オイル漏れ、パーツのゆるみなど機体の点検を行う前に、必ずエンジンを停止し、機械の可動部がすべて完全に停止したのを確認してください。

上記のうち一つでも異常があれば、作業に出発する前に整備士や上司にその旨を伝えてください。 現場により、上記以外の項目の点検を指示されることもありますから、実際に上司と話し合って確認するようにしてください。

ブレーキオイル量の点検

整備間隔: 使用するごとまたは毎日 車両初めて作動させる前に、ブレーキオイルの量を点検する。

ブレーキオイルのタイプ DOT 3

1. 平らな場所に駐車し、駐車ブレーキを掛け、ON/OFF スイッチを OFF にし、キーを抜き取る。
2. ダッシュボード中央部にあるゴム製のプラグ栓を外してブレーキのマスターシリンダおよびブレーキ液のタンクにアクセスできるようにする図 13。

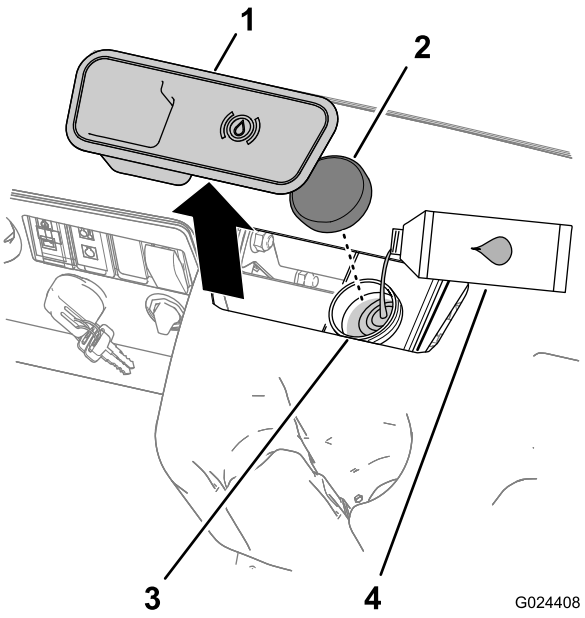


図 13

1. ゴム栓
2. タンクのキャップ
3. 補給管タンク
4. DOT 3 ブレーキオイル

3. タンクの側面についているマークで、量を点検する図 14。

   注 最低ラインより上まであればよい。

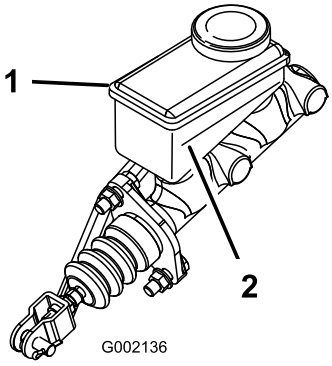


図 14

1. ブレーキオイルのタンク
2. 最低ライン

4. 量が不足している場合には、以下の作業を行う
   A. ウェスでタンクのキャップの周囲をきれいに拭いてキャップ外す図 13。
   B. 最低ラインより上まで DOT 3 ブレーキ液を補給する図 14。

   注 ブレーキ液を入れすぎないように注意してください。
   C. タンクにキャップを取り付ける図 13。
5. ダッシュボード上部にゴム栓を取り付ける図 14。

エンジンオイルの量を点検する

整備間隔: 使用するごとまたは毎日 エンジンを初めて作動させる前と後に、エンジンオイルの量を点検する。

エンジンオイル量の点検 (モデル 07266TC と 07279)

注 エンジンにはオイルを入れて出荷していますが、初回運転の前後に必ずエンジンオイルの量を確認してください。

オイルのタイプ 洗浄性オイル API 規格 SJ またはそれ以上

粘度 以下の表を参照のこと。

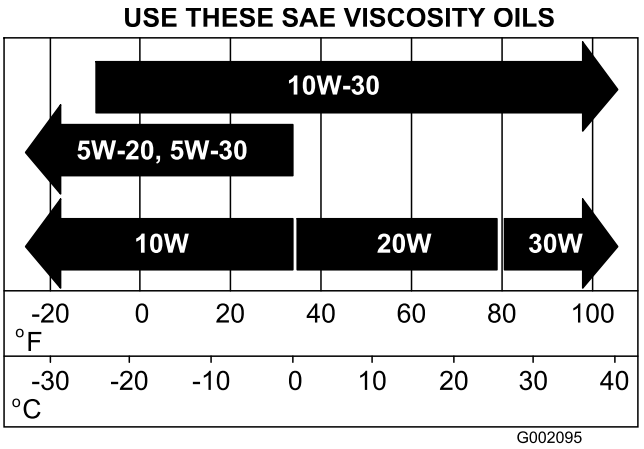


図 15

1. 平らな場所に駐車する。
2. 荷台を上げる 荷台を上げる (ページ 18)を参照。
3. 給油口からごみが入ってエンジンを傷つけないように、補給口図 16の周囲をウェスできれいに拭く。

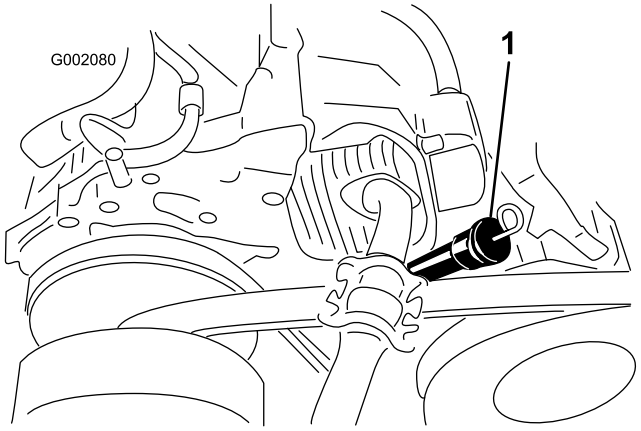


図 16

1. ディップスティックと補給口

4. ディップスティック図 16を回して抜き取り、付いているオイルをウェスで拭きとる。
5. ディップスティックを根元まで完全に差し込む図 16。
6. ディップスティックを引き抜いて油量を点検する。
7. 油量が足りなければディップスティックのFULL マークまで補給管からゆっくり補給する。

   注 補給するときはディップスティックで確認しながら少量ずつ入れてください。**入れすぎないように注意してください。**
8. ディップスティックを取り付ける。奥まで完全に差し込むこと図 16。
9. 荷台を降ろす 荷台を下げる (ページ 18)を参照。

エンジンオイル量の点検 (モデル 07273 と 07273TC)

注 エンジンにはオイルを入れて出荷していますが、初回運転の前後に必ずエンジンオイルの量を確認してください。

オイルのタイプ 洗浄性オイルAPI 規格 SF, SG, SH, SJ またはそれ以上

粘度 下の表を参照。

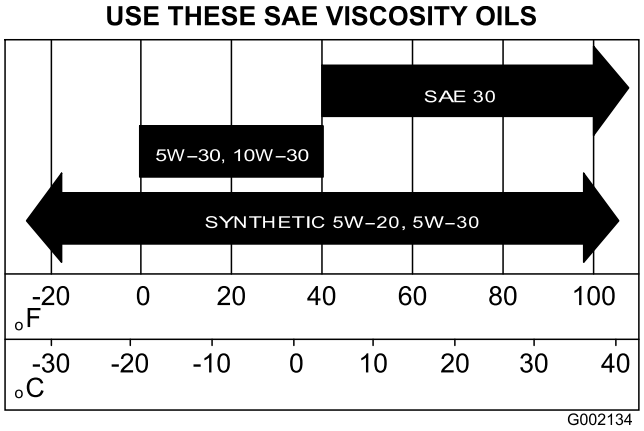


図 17

1. 平らな場所に駐車する。
2. 荷台を上げる 荷台を上げる (ページ 18)を参照。
3. ディップスティックや給油口からごみが入ってエンジンを傷つけないように、ディップスティックと補給キャップ図 18の周囲をウェスできれいに拭く。

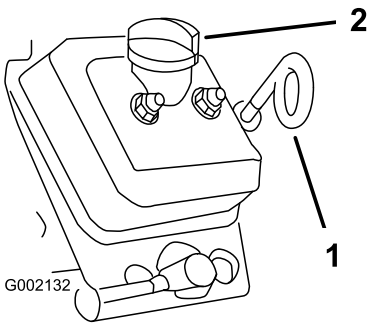


図 18

1. ディップスティックループ下　2. 補給口キャップ 補給管向き

4. ディップスティック図 18を回して抜き取り、付いているオイルをウェスで拭きとる。
5. ディップスティックを根元まで完全に差し込む図 18。
6. ディップスティックを引き抜いて油量を点検する。
7. オイルの量が不足している場合は、補給口のキャップを取り、適切な品質のオイルを、補給管からディップスティックの FULL マークまで補給する。

   注 補給するときはディップスティックで確認しながら少量ずつ入れてください。**入れすぎないように注意してください。**
8. キャップを取り付ける 図 18を参照。
9. ディップスティックを取り付ける。奥まで完全に差し込むこと図 18。

重要 ディップスティックのループの先端が下向きになるように差し込むこと。

10. 荷台を降ろす 荷台を下げる (ページ 18)を参照。

タイヤ空気圧を点検する

整備間隔: 使用するごとまたは毎日

タイヤ空気圧適正範囲 55103kPa (0.61.5kg/cm2)

重要 ただし、タイヤメーカーが指定している最大値タイヤ側面に記載されていますを超えないでください。

注 適性空気圧は、車両に積載する重量によって変わります。

1. タイヤ空気圧を点検する。

   注 タイヤ空気圧の適正範囲は、前後のタイヤとも 55-103 kPa 0.56-1.54 kg/cm2=8-22 psiです。

   - 空気圧が低い ほうが踏圧が低くなり、乗り心地も良く、タイヤ跡も残りにくくなりますが、
   - 積載する重量が大きいときや、高速で走行する場合にはタイヤ空気圧を高めに設定してください。

2. 必要に応じタイヤに空気を入れるか抜くかして適正圧に調整する。

燃料を補給する

- 機械の性能を最も良く発揮させるために、オクタン価87以上の、きれいで新しい購入後30日以内無鉛ガソリンを使ってくださいオクタン価評価法は(R+M)/2 を採用。
- **エタノール** エタノールを添加10% までしたガソリン、MTBEメチル第3ブチルエーテル添加ガソリン15% までを使用することが可能です。エタノールとMTBEとは別々の物質です。エタノール添加ガソリン15% 添加=E15は使用できません。**エタノール含有率が 10% を超えるガソリンは絶対に使用してはなりません**たとえば E15含有率 15%、E20含有率 20%、E85含有率 85%がこれにあたります。これらの燃料を使用した場合には性能が十分に発揮されず、エンジンに損傷が発生する恐れがあり、仮にそのようなトラブルが発生しても製品保証の対象とはなりません。
- メタノールを含有するガソリンは**使用できません**。
- 燃料タンクや保管容器でガソリンを**冬越しさせないでください。** 冬越しさせる場合には必ずスタビライザ品質安定剤を添加してください。
- ガソリンに**オイルを混合しないでください**。

⚠ 危険

燃料は非常に引火爆発しやすい物質である。発火したり爆発したりすると、やけどや火災などを引き起こす。

- **燃料補給は必ず屋外で、エンジンが冷えた状態で行う。こぼれた燃料はふき取る。**
- **箱型トレーラに本機を搭載した状態では、絶対に本機への燃料補給をしてはならない。**
- **燃料タンク一杯に入れないこと。燃料を補給する時は、タンク上面から約25mm下のレベルを超えて給油しない。これは、温度が上昇して燃料は膨張したときにあふれないように空間を確保するためである。**
- **燃料取り扱い中は禁煙を厳守し、火花や炎を絶対に近づけない。**
- **燃料は安全で汚れのない認可された容器に入れ、子供の手の届かない場所で保管する。30 日分以上の買い置きは避ける。**
- **必ず、適切な排気システムが取り付けられて正常に作動している状態で運転すること。**

⚠ 危険

燃料を補給中、静電気による火花がガソリンに引火する危険がある。発火したり爆発したりすると、やけどや火災などを引き起こす。

- **燃料容器は車から十分に離し、地面に直接置いて給油する。**
- **車に乗せたままの容器に燃料を補給しない。車両のカーペットやプラスチック製の床材などが絶縁体となって静電気の逃げ場がなくなるので危険である。**
- **可能であれば、機械を地面に降ろし、車輪を地面に接触させた状態で給油を行う。**
- **機械を車に搭載したままで給油を行わなければいけない場合には大型タンクのノズルからでなく、小型の容器から給油する。**
- **大型タンクのノズルから直接給油しなければならない場合には、ノズルを燃料タンクの口に常時接触させた状態で給油を行う。**

燃料を補給する

燃料タンク容量は約 26.5 リットルです。

1. エンジンを止め、駐車ブレーキを掛ける。
2. 燃料タンクのキャップ図 19の周囲をきれいに拭く。

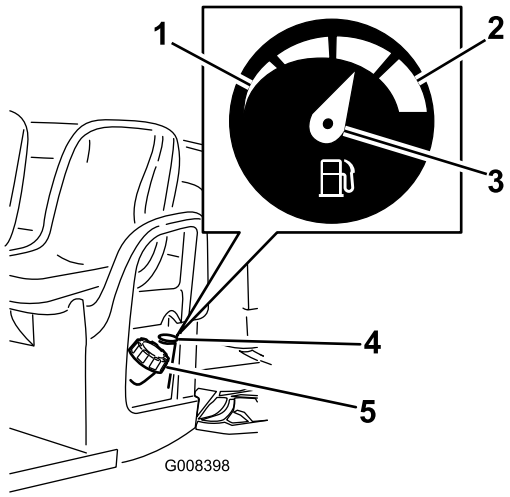


図 19

1. なし
2. 満タン
3. 指示針
4. 燃料計
5. 燃料タンクのキャップ

3. 燃料タンクのキャップを取る。
4. タンクの天井から約 25mm下給油口の根元まで燃料を入れる。

   注 これは、温度が上昇して燃料は膨張したときにあふれないように空間を確保するためである。**燃料を入れすぎないでください。**.
5. 燃料タンクのキャップをしっかりとはめる。
6. こぼれた燃料はふき取る。

エンジンの始動手順

重要 エンジンの押しがけや引きがけをしないでください。

1. 運転席に座り、ON/OFF スイッチにキーを差し込んで右回しに ON 位置まで回す On/Off スイッチ (ページ 16)を参照。

   注 オプションの後退アラームを装備している車両では、キーを ON にした状態でギアを後退にシフトするとブザーが鳴り、車両がバックすることをオペレータに知らせます。
2. ギアシフトセレクタを、走行したい方向前進または後退にセットする ギアシフトセレクタ (ページ 15)を参照。
3. 駐車ブレーキをレバーを押し下げて駐車ブレーキを解除する 駐車ブレーキレバー (ページ 14)を参照。
4. アクセルペダルをゆっくりと踏み込む。

   注 エンジンが冷えている場合には、アクセルペダルを半分程度まで踏み込んだ状態でチョークをON位置まで引く。エンジンのウォームアップが終了したら、チョークをOFFに戻す。

車両の停止手順

重要 斜面で停止するときは、ブレーキで完全停止後、駐車ブレーキを掛けて車両を固定してください。アクセルペダルで車両を斜面に停止させておくと車両が破損する恐れがあります。

1. アクセルペダルから足を離す (アクセルペダル (ページ 14))。
2. ゆっくりとブレーキペダル (ブレーキペダル (ページ 14)) を踏み込んでブレーキを掛けて車両を完全に停止させる。

   注 停止距離は積荷や走行速度などの条件によって異なります。

車両の駐車手順

1. ブレーキペダルを十分に踏み込んで車両を停止させる ブレーキペダル (ページ 14)を参照。
2. 駐車ブレーキレバー引き上げるて、駐車ブレーキをかける 駐車ブレーキレバー (ページ 14)を参照。
3. キーを左に回して OFF 位置にする On/Off スイッチ (ページ 16)を参照。
4. ON/OFF スイッチからキーを抜き取る。

新車の慣らし運転

整備間隔: 使用開始後最初の 100 時間—慣らし運転のためのガイドライン。

新しい車両の性能がフルに発揮され永くお使いいただけるよう、以下のガイドラインを守ってください。

- エンジンオイルその他の液類の量を定期的に点検する。車両そのものや、車両を構成している機器が過熱していないか注意を払う。
- エンジンが冷えている時には、始動後15秒間程度のウォームアップを行う。
- 使用開始後最初の数時間は急ブレーキを掛けないように注意する。ブレーキのライニングは数時間程度の慣らしがけが必要である。
- 意識的に速度を変えながら走行する。急発進や急停止をしない。
- エンジンオイルの初期交換は不要。初期オイルには通常のエンジンオイルを使用している。
- 初期整備については 特殊な使用条件下で使用する場合の保守整備について (ページ 28)を参照する。
- 前サスペンションの位置を定期的に点検し、必要に応じて調整を行う 前輪のトーインとキャンバの調整 (ページ 41)を参照。

荷台への搭載について

荷台に資材を積み込んだ状態で運転する場合には、以下の注意点を守ってください

- 荷台に積むことのできる重量を守ってください。これらについては、仕様 (ページ 17)に記載してあります。また、車両最大定格総重量は機体の銘板に表示してあります図 20。

  注 注積荷などの定格値は、平地での使用についての数字ですからご注意ください。

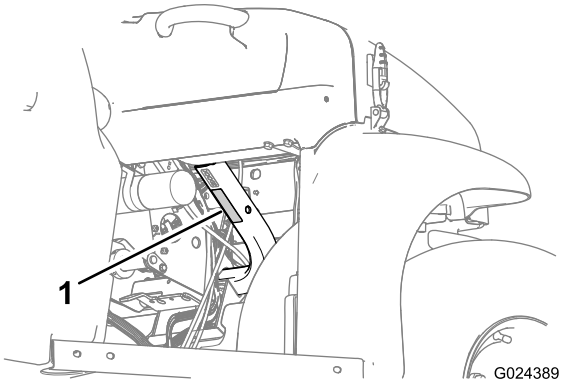


図 20

1. 車両総重量GVWステッカー

- 傾斜地や不整地で資材の運搬を行う場合には、通常よりも積荷を減らしてください。
- また、背の高い資材を運ぶときおよび袋入りの肥料を荷台に積み上げて運ぶときなどのように車両全体の重心が高くなるような積荷を積んでいる場合にも、積荷を減らしてください。積荷はできるだけ低く積んでください。積荷によって後方の視界がさえぎられないようにしてください。
- 荷台を以下のように使用して、車両全体の重心をできるだけ低く維持してください
  - 重量を左右にバランスよく配分してください。

    重要 どちらかに片寄った積み方をすると転倒事故を起こす危険が高くなります。
  - 荷台の前後方向にも重量をバランスよく配分してください。

    重要 後輪の車軸よりも後ろに荷物を積みすぎると前輪に掛かる荷重が小さくなり、ハンドルの効きが悪くなるだけでなく、最悪の場合後ろのめりに転倒します。
- 荷台からはみ出るような積み方しかできない場合には、運転に十二分に注意してください。特に、そのような荷物を積んだ結果として車両全体の重心が車両の中心にない場合には非常に慎重な運転が必要です。
- 可能な限り、積荷はロープで縛るなどして荷台に確実に固定してください。
- 大きなタンクに液体を入れて運ぶとき例えば薬剤散布の場合などは、上り坂や下り坂に特にご注意ください。また走行速度を急に変えない、急発進・急ブレーキをしないでください。

荷台の容量は 0.37 m^3です。荷物の種類によっては荷台に一杯に積むと積載オーバーになりますから注意が必要です。 例えば荷台一杯にぬれた砂を積むと、その重量は 680 kg 程度になり、本機の最大積載重量を 113 kg もオーバーします。しかし、木材を荷台に平らに積んだ場合には 295 kg で規定重量以下です。

積荷の種類と重量との関係については以下の表を参照してください。

資材名	密度	荷台の最大積載量 平坦路面の場合
砂利, 乾燥	1 521.7 kg/m^3 (95 lb/ft^3)	満タン
砂利, ぬれた状態	1 922.2 kg/m^3 (120 lb/ft^3)	荷台に3/4
砂, 乾燥	1 441.6 kg/m^3 (90 lb/ft^3)	満タン
砂, ぬれた状態	1 922.2 kg/m^3 (120 lb/ft^3)	荷台に3/4
木材	720.8 kg/m^3 (45 lb/ft^3)	満タン
バーク	<720.8 kg/m^3 (<45 lb/ft^3)	満タン
土嚢	1 601.8 kg/m^3 (100 lb/ft^3)	荷台に3/4おおよそ

移動走行を行うとき

長距離を搬送する場合にはトレーラを使用してください。その場合、車体をトレーラに確実に固定して輸送してください。 ロープがけのポイントについては図 22 と 図 21 を参照してください。

⚠ 注意

トレーラで移送中、ワークマンの座席がゆるいと、座席が落下する可能性があり、道路交通上非常に危険である。

車両を搬送する時は、座席を外すか、座席シュラウドにあるカップリングにしっかりと固定しておくこと。

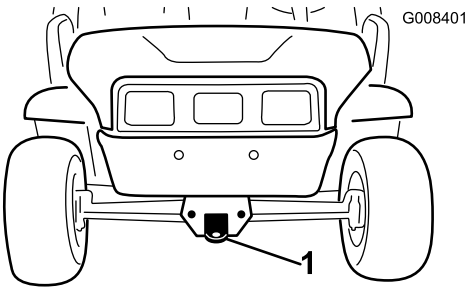


図 21

1. 牽引トングおよびロープ掛けのポイント機体前部

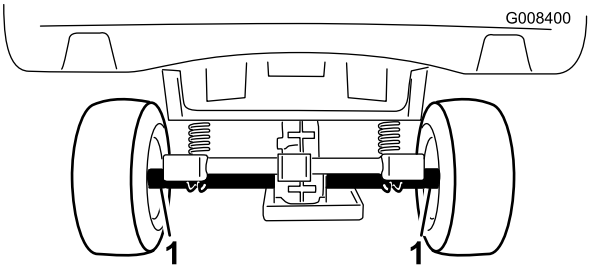


図 22

1. ロープ掛けのポイント機体後部

緊急時の牽引について

緊急時には、短距離に限り、本機を牽引して移動することができます。ただし、通常の移動にはこの方法を使わないでください。

⚠ 警告

牽引時の速度が速すぎると、ハンドル操作ができなくなって人身事故となる危険がある。

牽引速度は時速 8 km/h 以下を厳守すること。

牽引作業は二人で行います。 長い距離を移動しなければならない場合にはトレーラなどを使用してください 移動走行を行うとき (ページ 24)を参照。

1. 機体から駆動ベルトを取り外す 駆動ベルトの交換 (ページ 47)を参照。
2. 機体前部にある牽引トングにロープなどの牽引索を取り付ける図 21。
3. トランスミッションのシフトをニュートラルにセットし、駐車ブレーキを解除する ギアシフトセレクタ (ページ 15)と 駐車ブレーキレバー (ページ 14)を参照。

トレーラを牽引する場合

ワークマンでトレーラやアタッチメントを牽引することができます。 牽引を行う場合、トレーラの重量により2種類のヒッチを使い分けてください。 くわしくはトロ社代理店にご相談ください。

ワークマン自体やトレーラ自体が過積載にならないように注意してください。 どちらかひとつでも過積載状態では、車両の性能が十分発揮できないばかりか、ブレーキ、車軸、トランスアクスル、モータ、ハンドル機構、サスペンション、ボディー構造、タイヤ等を破損する場合もあります。 必ず積載重量の60をトレーラの前側に振り分けてください。 これにより、ヒッチプレートに掛かる負荷がトレーラの総重量グロスの約10となります。

- **モデル 07266TC と 07279:**車両総重量GTWを含めた最大積載重量が 567 kg を超えてはなりません。例 総重量グロスが 181.5 kg の場合、積荷の最大積載可能重量は 386 kg となります。
- **モデル 07273 と 07273TC:**車両総重量GTWを含めた最大積載重量が 749 kg を超えてはなりません。例 総重量グロスが 181.5 kg の場合、積荷の最大積載可能重量は 567 kg となります。

ブレーキ性能を確保するため、牽引するときには必ず荷台に積載してください。 但し車両総重量やトング総重量を超えないでください。

トレーラを牽引した状態で斜面に駐車しないでください。 どうしても斜面に駐車する必要がある場合には、駐車ブレーキを掛け、トレーラに車止めをかけてください。

保守

注 お使いの機械の*電気回路図*を入手したい場合には、以下のインターネットサイトから無料でダウンロードすることができます www.Toro.com。また、マニュアルから、インターネット上のその機械の紹介ページへ行きたい場合にもご利用ください。

注 前後左右は運転位置からみた方向です。

推奨される定期整備作業

整備間隔	整備手順
使用開始後最初の 8 時間	· 走行ベルトの状態を点検する。 · スタータジェネレータベルトの張りを点検する。
使用開始後最初の 25 時間	· エンジンオイルを交換する。 · オイルフィルタを交換する(モデル 07273 と 07273TC)
使用開始後最初の 50 時間	· カーボンキャニスタ用エアフィルタの点検 · カーボンキャニスタフィルタを交換する.
使用開始後最初の 100 時間	· 慣らし運転のためのガイドライン。
使用開始後最初の 200 時間	· エアフィルタのエレメントを交換する。
使用するごとまたは毎日	· 始動前の点検を行います。毎日、運転前に以下の項目を点検してください。 · ブレーキオイルの量を点検する。 · エンジンオイルを点検する。 · タイヤ空気圧を点検します。 · ギアシフトの操作を点検する。
100運転時間ごと	· ベアリングとブッシュのグリスアップを行う. · エアフィルタを点検する。エアフィルタがひどく汚れていたり破損したりしている場合には直ちに交換する。 · エンジンオイルを交換する。 · オイルフィルタを交換する(モデル 07273 と 07273TC) · 点火プラグを点検する。 · タイヤとリムの状態を点検する。 · ホイールナットのトルク締めを行う。 · 前輪のトーインとキャンバの点検を行う · トランスアクスルオイルの量。 · ニュートラル・ギア·シフト位置の点検を行う。 · 冷却部の汚れ具合を点検する。 · ブレーキを点検する。
200運転時間ごと	· カーボンキャニスタ用エアフィルタの点検 · カーボンキャニスタフィルタを交換する. · 必要に応じて駐車ブレーキを調整する。 · 走行ベルトの状態と張りを点検する。 · スタータジェネレータベルトの張りを点検する。
300運転時間ごと	· 前ホイールベアリングのグリスアップを行う。
400運転時間ごと	· 燃料ラインとその接続状態を点検する。 · 走行用一次クラッチの清掃と潤滑を行う。
800運転時間ごと	· 燃料フィルタを交換する。 · トランスアクスルオイルを交換する。
1000運転時間ごと	· ブレーキオイルを交換する。
1年ごと	· エンジンマニュアルに記載されている1年ごとの定期整備をすべて実施する。

重要 エンジンの整備に関しての詳細は、付属のエンジンマニュアルを参照のこと。

始業点検表

このページをコピーして使ってください。

点検項目	第 週						
	月	火	水	木	金	土	日
ブレーキと駐車ブレーキの作動状態							
ギアシフト/ニュートラルの操作							
燃料残量を点検する。							
オイルの量を点検する。							
トランスアクスルオイルの量を点検する。							
エアフィルタを点検する。							
エンジンの冷却フィンを点検する。							
エンジンからの異常音がないか点検する。							
運転操作時の異常音。							
タイヤ空気圧を点検する。							
オイル類が漏れていないか点検する。							
計器類の動作を確認する。							
アクセルペダルの作動状態を確認する。							
各グリス注入部のグリスアップを行う。							
塗装傷のタッチアップ修理を行う。							

⚠ 警告

整備作業の中には荷台を外して行わなければならないものがある。

上昇させた荷台が万一落下すると、人身事故となる。

- **荷台の下で作業する時は、必ず支持棒で荷台を支えておくこと。**
- **荷台の下で作業するときは荷台を空にしておく。**

⚠ 注意

キーをつけたままにしておくと、誰でもいつでも車両を発進させることができ、危険である。

整備・調整作業の前には必ず始動スイッチからキーを抜きとり、点火プラグ装着車の場合は、念のために点火プラグのコードを外しておくこと。点火コードが絶対に点火プラグと触れることのないよう、確実に隔離すること。

整備前に行う作業

特殊な使用条件下で使用する場合の保守整備について

以下のような条件で使用する場合には、保守間隔を通常の半分に短縮し、より頻繁な整備を行ってください

- 砂漠、荒れ地での作業
- 酷寒地気温10℃以下での作業
- トレーラ作業
- 使用時間が極端に短い場合一回の使用時間が5分間に満たないような場合
- 非常にほこりの多い条件下での頻繁な使用
- 建設現場での使用
- 泥、砂、水などの悪条件下で長時間使用した場合は、直後にブレーキの洗浄と点検を行う。これにより無用な摩耗を防止することができる。
- 重量物を運んだり悪条件下での作業が多い場合には、グリスアップを毎日行い、エアクリーナを毎日点検する。

車両の保守作業を行うための準備

1. 平らな場所に駐車する。
2. 駐車ブレーキを掛け、エンジンを停止し、キーを抜き取る。
3. エンジンおよび排気系統が冷えるのを待つ。

マシンを持ち上げる

⚠ 危険

ジャッキアップされている車体は不安定である。ジャッキが外れると下にいる人間に怪我を負わせる危険が高い。

- **ジャッキアップした状態では車両を始動しないこと。**
- **車両から降りる時は必ず始動スイッチからキーを抜いておく。**
- **ジャッキなどで浮かせた車両には輪止めを掛ける。**
- **床から車両を浮かせたら必ずジャッキスタンドで支える。**

重要 保守整備のためにエンジンを掛ける場合には、車両後部をジャッキアップする必要があります後アクスルにジャッキを掛け、25mm程度ジャッキアップしてください。

- 車両前部のジャッキアップポイントは、牽引トングの後ろのフレーム前部です図 23。

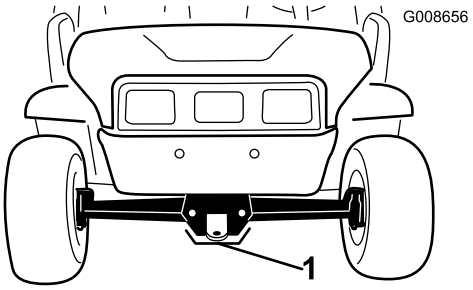


図 23

1. 前部のジャッキアップ位置

- 車体後部のジャッキアップポイントはアクスルチューブの下側です図 24。

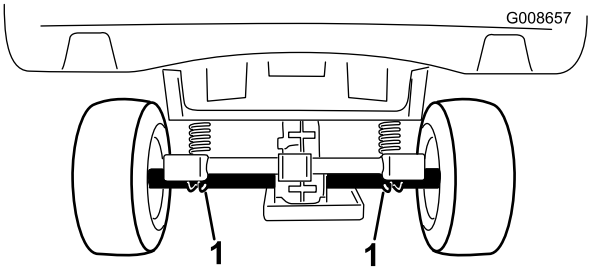


図 24

1. 車体後部のジャッキアップ位置

フードへのアクセス

フードを上げる

1. フードの両側についているゴム製ラッチのハンドルを上げる (図 25)。

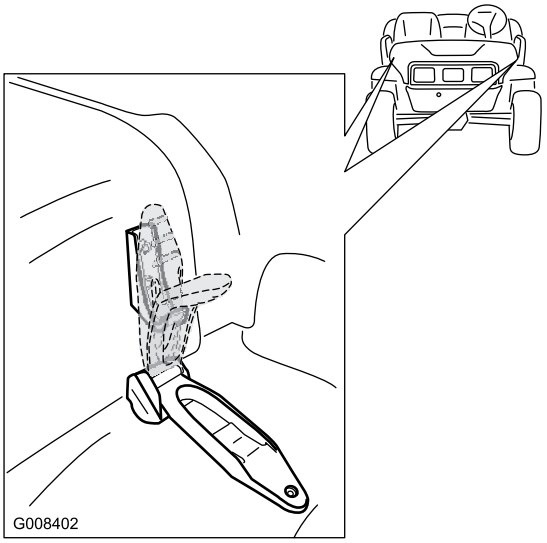


図 25

2. フードを上げる。

フードを閉じる

1. 静かにフードをシャーシの上に降ろす。
2. フードの両側で、ラッチとラッチアンカーをそろえてラッチを掛ける (図 25)。

潤滑

グリスアップ

整備間隔: 100運転時間ごと/1年ごと いずれか早く到達した方—ベアリングとブッシュのグリスアップを行う. 悪条件下で作業を行っている場合にはグリスアップ間隔を短くしてください。

グリスの種類No.2リチウム系汎用グリス

1. 異物を入れてしまわないよう、グリスフィッティングをウェスできれいに拭く
2. フィッティングにグリスガンを接続し、1-2回のポンプ動作でグリスを注入する。
3. はみ出したグリスは表面からきれいにふき取る。

タイロッドの端部4か所図 26とキングピン2か所図 27にグリスフィッティングがあります。

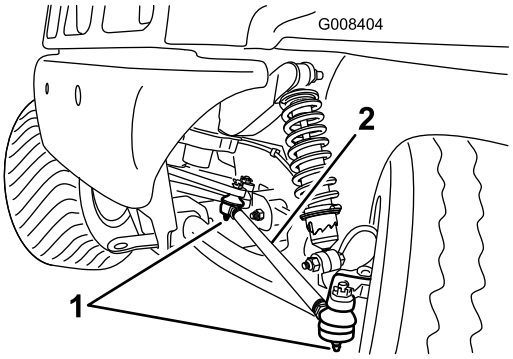


図 26
図は左側を示す

1. グリスフィッティング
2. タイロッド

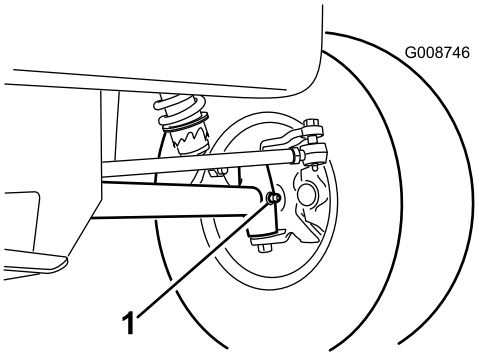


図 27
図は左側を示す

1. グリス・ニップル キングピン

前ホイールベアリングのグリスアップ

整備間隔: 300運転時間ごと

グリスの仕様 Mobilgrease XHP™-222

ハブとロータを取り外す

1. 機体の前部を持ち上げてジャッキスタンドで支える。
2. ホイールをハブに固定しているラグナット5個を外す図 28。

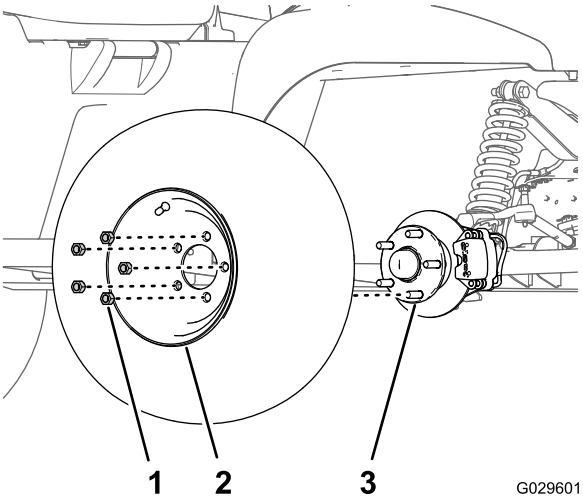


図 28

1. ラグナット
2. ホイール
3. ハブ

3. ブレーキアセンブリ用のブラケットをスピンドルに固定しているフランジヘッドボルト3/8 x 1 インチを外してスピンドルからブレーキを取り外す 図 29。

   注 ブレーキアセンブリを確実に支持してから次の工程に進んでください。

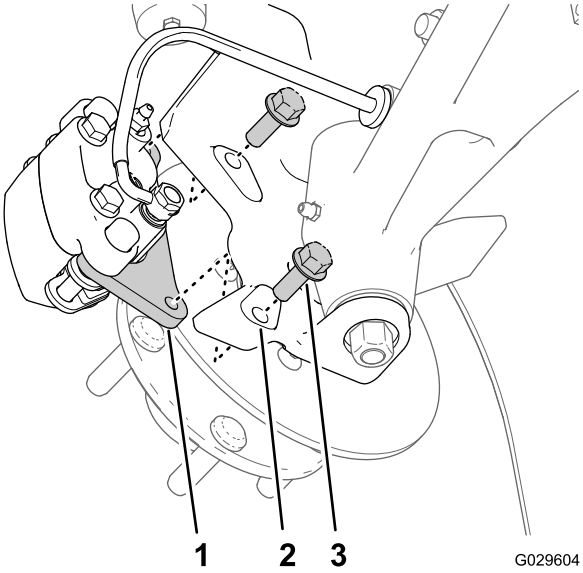


図 29

1. キャリパブラケットブレーキアセンブリ
2. スピンドル
3. フランジヘッドボルト3/8 x /1 インチ

4. ハブからダストキャップを取る図 30。

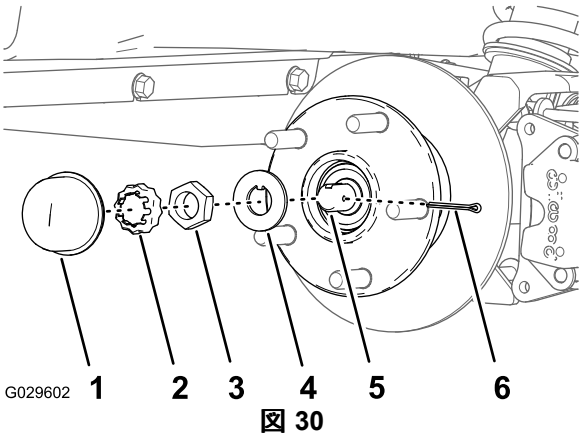


図 30

1. ダストキャップ
2. ナットリテーナ
3. スピンドルナット
4. タブワッシャ
5. スピンドル
6. コッターピン

5. スピンドルとスピンドルナットから、コッターピンとハットリテーナを外す図 30。
6. スピンドルからスピンドルナットを外し、スピンドルからハブローラアセンブリを取り出す 図 30 と 図 31。

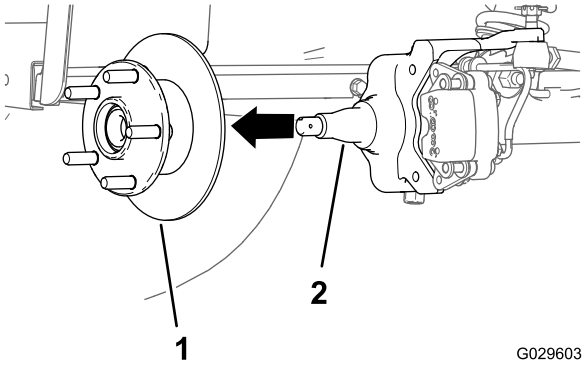


図 31

1. ハブロータアセンブリ
2. スピンドル

7. スピンドルをウェスできれいに拭く。
8. マシンの反対側のハブとロータについても 1 から7 の作業を行う。

ホイールベアリングのグリスアップ

1. ハブから外側のベアリングとベアリングレースを取る 図 32。

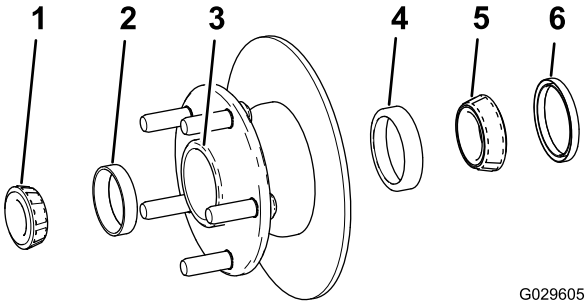


図 32

1. 外側のベアリング
2. 外側ベアリングのレース
3. ベアリングのキャビティ
4. 内側ベアリングのレース
5. 内側のベアリング
6. シール

2. ハブから、シール、内側のベアリングとベアリングレースを取る 図 32。
3. シールをきれいに拭いて摩耗や破損がないか点検する。

   注 シールの洗浄には溶剤を使用しないでください。過度な磨耗や破損が見られた場合はシールを交換する。
4. ベアリングとレースをきれいに拭いて摩耗や破損がないか点検する。

   注 摩耗・破損しているパーツはすべて交換してください。ベアリングとレースの水気や汚れを完全に取り除いてください。
5. ハブについているグリス、ごみなどをきれいに取り除く 図 32。
6. ベアリングに所定のグリスを詰める。
7. ハブに、内側のベアリングレースと外側のベアリングレースを取り付ける 図 32。

   注 レースを、ハブのボアに密着させてください。
8. キャビティの5080程度にグリスを詰める 図 32。
9. ハブの内側に内側ベアリングを取り付け、シールをはめる 図 32。
10. もう一方のハブにも、ステップ19の作業を行う。

ハブとロータを取り付ける

1. スピンドルに所定のグリスを薄く塗る 図 33。

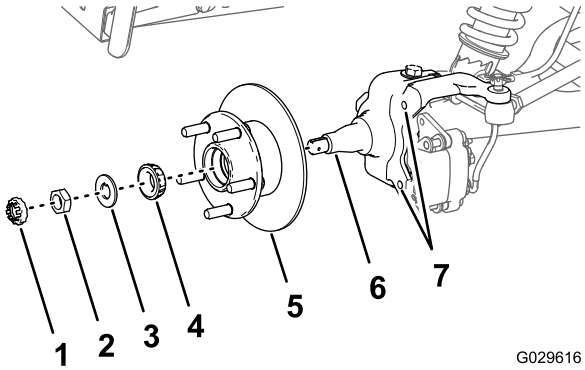


図 33

1. リテーナ
2. スピンドルナット
3. タブワッシャ
4. 外側ベアリング
5. ハブ、ロータ、内側ベアリング、レース、シール
6. スピンドル
7. 穴スピンドルフレームのブレーキ取り付け部

2. ハブとロータをスピンドルに取り付ける。ロータを内側にすること 図 33。
3. スピンドルに外側ベアリングを取り付けてレースにはめる 図 33。
4. スピンドルにタブワッシャを取り付ける 図 33。
5. スピンドルにスピンドルナットを取り付け、ハブを回しながらナットを締めつける 図 33。

   注 ナットを締め付け、ベアリングが完全に着座してハブのガタが完全になくなるまでスピンドルを回す。
6. ハブが自由に回転できるところまでスピンドルをゆるめる。
7. そして、ハブを回転させながら、スピンドルナットを 170N.cm 0.17kg.m = 15in-lbにトルク締めする。
8. ナットの上からリテーナを取り付け、リテーナのスロットとスピンドルのスロットが整列しているかどうか確かめる 図 34。

   注 スロット同士が整列していない場合は、スピンドルナットを締めて整列させてください。ただし、その時の最大トルクが 226N.cm 0.23kg.m = 20in-lbを超えないようにしてください。

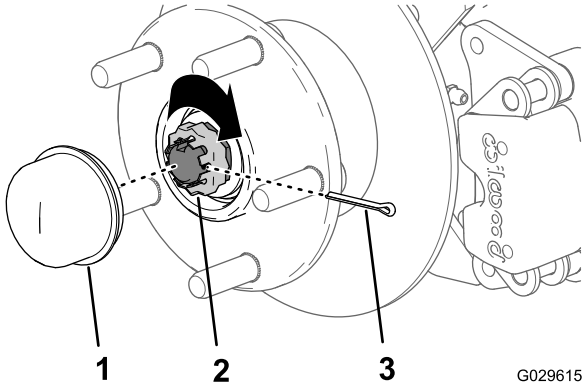


図 34

1. ダストキャップ
2. ナットリテーナ
3. コッターピン

9. コッターピンを取り付け、ピンの足をリテーナに巻き付けるように曲げる図 34。
10. ハブにダストキャップを取り付ける図 34。
11. マシンの反対側のハブとロータについても 1から10 の作業を行う。

ブレーキとホイールを取り付ける

1. フランジヘッドボルト3/8 x 1 インチ2本をきれいに拭き、ねじ山に固着防止剤を塗る。
2. ブレーキパッドをロータのそれぞれの側に合わせ図 29、キャリパブラケットの穴と、スピンドルフレームのブレーキ取り付け部の穴を整列させる図 33。
3. キャリパブラケットをスピンドルに組み付ける図 29フランジヘッドボルト3/8 x 1 iインチ2本を使用し、4754N·cm 0.400.46kg.m にトルク締めする。
4. ホイールをハブに取りつける。空気バルブを外側に向けて取り付けること図 28。

   注 ホイールがハブと面一になるよう取り付けてください。
5. ホイールをハブに固定し図 28、ラグナットを108122Nm 11.012.5kg.m = 8090ft-lb にトルク締めする。
6. マシンの反対側のブレーキとホイールについても 15 の作業を行う。

エンジンの整備

エアフィルタの整備

整備間隔: 100運転時間ごと エアフィルタがひどく汚れていたり破損したりしている場合には直ちに交換する。

使用開始後最初の 200 時間

注 ほこりのひどい場所で使用する場合はより頻繁に数時間ごとにエアクリーナの手入れを行ってください。

エアフィルタの点検

1. 荷台を上げ、支持棒で支える 荷台を上げる (ページ 18)を参照。
2. エアクリーナ本体にリーク原因となりそうな傷がないか点検してください。本体とカバーがシールでしっかり密着しているのを確認する (図 35 と 図 36)。

   注 ボディーが破損している場合は交換してください。

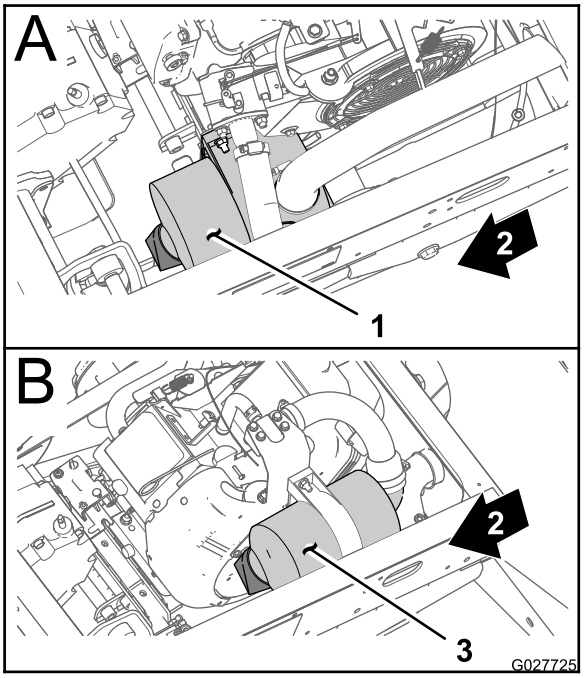


図 35

1. エアフィルタ･アセンブリ (モデル 07266TC と 07279)
2. 機体背面
3. エアフィルタ･アセンブリ (モデル 07359 と 07359TC)

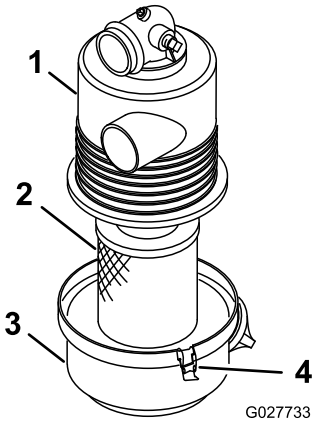


図 36

1. エアフィルタのハウジング
2. エアフィルタのエレメント
3. エアフィルタのカバー
4. ラッチ

3. エアフィルタのカバーをエアフィルタのハウジングに固定しているラッチを外す図 36。
4. ボディーからカバーを外し、カバーの内部を清掃する図 36。
5. フィルタハウジングからエレメントを丁寧に抜き出す。

   注 フィルタをハウジングにぶつけると汚れが飛び散ります。ぶつけないように注意してください。
6. エアフィルタのエレメントを点検する。
   - エレメントがきれいな場合は、元通りに取り付ける エアフィルタを取り付ける (ページ 33)を参照。
   - エレメントが破損している場合は、新しいものに交換する エアフィルタの交換 (ページ 33)を参照。

エアフィルタの交換

1. エアフィルタのエレメントを取り外すを参照。
2. 新しいフィルタの場合は出荷中の傷がないか点検する。

   注 特にフィルタの密着部に注意する。

   重要 破損しているフィルタを再使用しないでください。
3. 新しいエアフィルタを取り付ける エアフィルタを取り付ける (ページ 33)を参照。

エアフィルタを取り付ける

重要 エンジンを保護するため、エンジンは必ずエアクリーナ・アセンブリ全体を取り付けて使ってください。

重要 破損しているフィルタは使用しない。

注 エレメントを洗って再使用しないでください。フィルタの濾紙が破損する可能性があります。

1. カバーについている異物逃がしポートを清掃する。
2. カバーについているゴム製のアウトレット・バルブを外し、内部を清掃して元通りに取り付ける。
3. エアフィルタのハウジングにエレメントを取り付ける (図 36)。

   注 取り付け時には、エアクリーナの外側リムをしっかり押さえて確実にボディーに密着させる。フィルタの真ん中柔らかい部分を持たない。
4. エアクリーナのカバーとハウジングを合わせる図 36。
5. カバーをハウジングにラッチで固定する(図 36)。
6. 荷台を降ろす 荷台を下げる (ページ 18)を参照。

エンジンオイルについて

整備間隔: 使用開始後最初の 25 時間

100運転時間ごと エンジンオイルを交換する悪条件下で使用している場合には整備間隔を半分に縮める「特殊な使用条件下で使用する場合の保守整備について」の項を参照。

注 ほこりのひどい場所で使用する場合は、より頻繁なオイル交換が必要です。

注 使用済みのオイルやフィルタはリサイクルセンターに持ち込むなど適切な方法で処分してください。。

エンジンオイルの交換モデル 07266TC と 07279

オイルのタイプ 洗浄性オイルAPI 規格 SJ またはそれ以上

オイルの量 1.1 リットル

粘度以下の表を参照のこと。

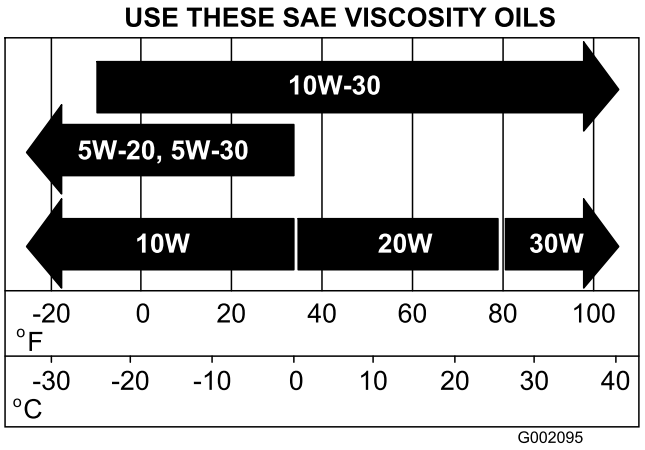


図 37

1. エンジンを始動し、数分間程度運転する。
2. 平らな場所に駐車し、駐車ブレーキを掛け、ON/OFF スイッチを OFF にし、キーを抜き取る。
3. 荷台を上げ、支持棒で支える 荷台を上げる (ページ 18)を参照。
4. バッテリーのプラスケーブルの接続を外す バッテリーの接続を外す (ページ 38)を参照。
5. ドレンプラグの下に、容量1.5リットル程度の大きさのオイル受け容器をおく (図 38)。

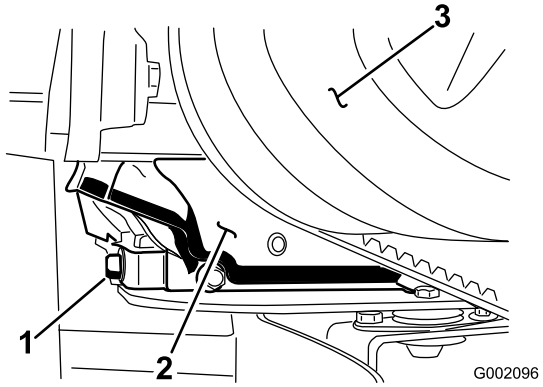


図 38

1. エンジンオイルのドレンプラグ
2. エンジン
3. 走行用 1 次クラッチ

6. ドレンプラグを抜く(図 38)。

   注 オイルが完全に抜けるのを待つ。
7. ドレンプラグとシールを元通りに取り付け、17.6 N·m1.8 kg.m=13 ft-lbにトルク締めする。
8. ディップスティックと補給口の周辺をきれいに拭いてからディップスティックを抜き出す (図 39)。

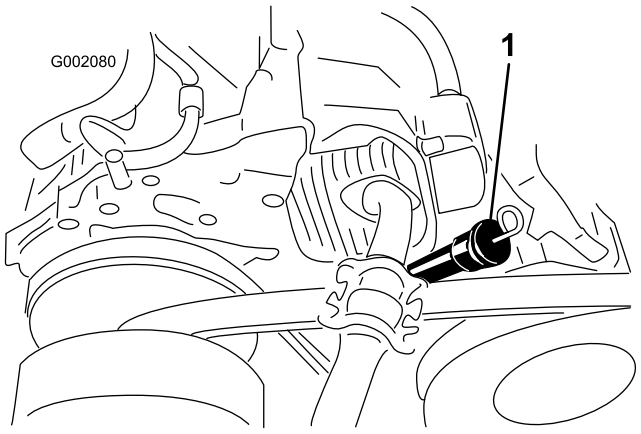


図 39

1. ディップスティックと補給口

9. ディップスティックのFull 位置まで、給油口から適切なオイルを補給する (図 39)。

   注 補給するときはディップスティックで確認しながら少量ずつ入れてください。**入れすぎないように注意してください。**
10. ディップスティックを補給口に根元まで差し込んでから抜き取ってオイル量を確認する (図 39)。

    注 必要に応じ、ディップスティックの”FULL”マークに達するまで補給口からオイルを補給する
11. ディップスティックを補給口にしっかりと取り付ける (図 39)。
12. バッテリーを元通りに接続し、荷台を降ろす バッテリーを接続する (ページ 39)と 荷台を下げる (ページ 18)を参照。

エンジンオイルの交換モデル 07273 と 07273TC

オイルのタイプ 洗浄性オイルAPI 規格 SL またはそれ以上

クランクケースのオイル量 1.4 リットルフィルタ交換時

粘度 下の表を参照。

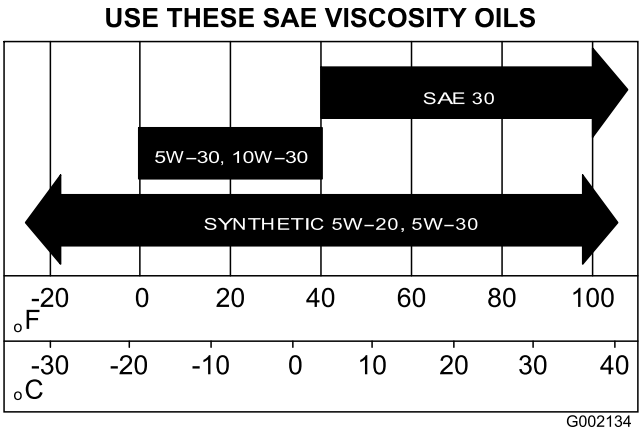


図 40

1. エンジンを始動し、数分間程度運転する。
2. 平らな場所に駐車し、駐車ブレーキを掛け、ON/OFF スイッチを OFF にし、キーを抜き取る。
3. 荷台を上げ、支持棒で支える 荷台を上げる (ページ 18)を参照。
4. バッテリーのプラスケーブルの接続を外す バッテリーの接続を外す (ページ 38)を参照。
5. ドレンプラグの下に、容量1.8リットル程度の大きさのオイル受け容器をおく (図 41)。

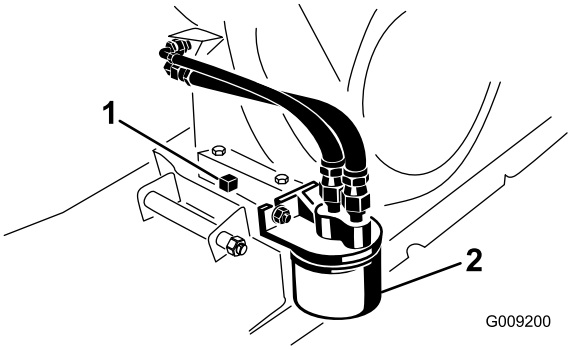


図 41

1. エンジンオイルのドレンプラグ　2. エンジンオイルのフィルタ

6. ドレンプラグを抜きシールを外す図 41)。

   注 オイルが完全に抜けるのを待つ。

7. ドレンプラグとシールを元通りに取り付けて17.6 N ·m1.8 kg.m=13 ft-lbにトルク締めする。
8. ディップスティックとキャップ、補給管の周辺をきれいに拭いてからディップスティックを抜き出す (図 42)。

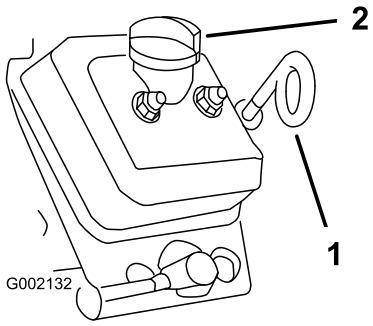


図 42

1. ディップスティックループ下　2. 補給口キャップ (補給管) 向き

9. キャップを外し、ディップスティックのFull位置まで、給油口から適切なオイルを補給する (図 42)。

   注 補給するときはディップスティックで確認しながら少量ずつ入れてください。**入れすぎないように注意してください。**

10. ディップスティックを補給管に根元まで差し込んでから抜き取ってオイル量を確認する (図 42)。

    注 必要に応じ、ディップスティックの "FULL" マークに達するまで補給口からオイルを補給する

11. 補給管にディップスティックを取り付け、しっかりとキャップを取り付ける (図 42)。
12. バッテリーを元通りに接続し、荷台を降ろす バッテリーを接続する (ページ 39)と 荷台を下げる (ページ 18)を参照。

オイルフィルタの交換モデル 07273 と 07273TC

整備間隔: 使用開始後最初の 25 時間

100運転時間ごと/1年ごと いずれか早く到達した方 エンジンオイルを交換する悪条件下で使用している場合には整備間隔を半分に縮める「特殊な使用条件化で使用する場合の保守整備について」の項を参照。

注 モデル 07266TC と 07279にはオイルフィルタはありません。

1. エンジンからオイルを抜くステップ 1-7 エンジンオイル量の点検 (モデル 07273 と 07273TC) (ページ 21)を参照。
2. 既存のオイルフィルタを外す図 41。
3. 新しいフィルタのガスケットにきれいなエンジンオイルを薄く塗る。
4. ガスケットが取りつけプレートに当たるまで手で回して取り付け、そこから更に1/2-3/4回転増し締めする図 41。

   注 フィルタを締めすぎないように注意してください。

5. 所定のエンジンオイルを入れる 図 40 (エンジンオイルの交換モデル 07273 と 07273TC (ページ 34)) を参照。
6. エンジンを始動し、オイル漏れがないか、しばらく点検する。
7. エンジンを停止し、オイルの量を点検する。

   注 必要に応じ、ディップスティックの "FULL" マークに達するまで補給口からオイルを補給する

点火プラグの整備

点火プラグの点検と交換

整備間隔: 100運転時間ごと/1年ごと いずれか早く到達した方 必要に応じて点火プラグを交換する。

タイプ Champion RN14YCまたは同等品

エアギャップ0.76mm

重要 割れ、欠け、汚れその他の不具合のある点火プラグは交換してください。点火プラグにサンドブラストをかけたり、ナイフ状のもので削ったりワイヤブラシで清掃したりしないでください。プラグに残った細かい破片がシリンダ内に落ちる恐れがあります。実際にこれが起こるとエンジンを破損します。

注 点火プラグは非常に耐久性のある部品ですが、エンジンにトラブルが出た場合は必ず点検してください。

1. 点火プラグを外した時にエンジン内部に異物が落ちないようにプラグの周囲をきれいに清掃する。
2. 点火プラグから点火コードを外す。
3. シリンダヘッドから点火プラグを外す。
4. 電極 (側面と中央) と碍子の状態を点検する (図 43)。

   注 破損したり磨耗したりした点火プラグを使用しないでください。所定タイプの新しいプラグに交換してください。

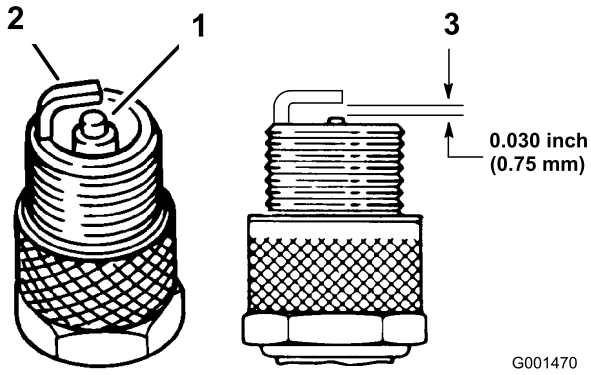


図 43

1. 中央の電極の碍子
2. 側部の電極
3. 隙間実寸ではない

5. 電極間のエアギャップを 0.76mm に調整する (図 43)。
6. シリンダヘッドに点火プラグを取り付け、20 N·m2 kg.m=14.7 ft-lbにトルク締めする。
7. 点火プラグに点火ケーブルを取り付ける。
8. **モデル 07273 および 07273TC のみ**他のプラグについても、ステップ1-7を行う。

燃料系統の整備

燃料ラインとその接続の点検

整備間隔: 400運転時間ごと/1年ごと いずれか早く到達した方

燃料ライン、フィッティング、クランプなどに、漏れ、劣化、破損、ゆるみなどが出ていないか点検を行ってください。

注 燃料系統の部品にこうした症状が見られた場合には、それらの部品を交換してください。

燃料フィルタの交換

整備間隔: 800運転時間ごと/1年ごと いずれか早く到達した方

1. 荷台を上げ、支持棒で支える 荷台を上げる (ページ 18)を参照。
2. キーを OFF 位置にして抜き取る。
3. バッテリーの接続を外す バッテリーの接続を外す (ページ 38)を参照。
4. 燃料フィルタの下に汚れのない容器をおく。
5. フィルタを燃料ラインに固定しているクランプを外す図 44。

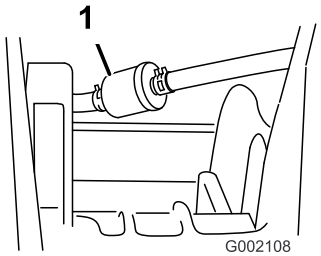


図 44

1. 燃料フィルタ

6. 燃料ホースからフィルタを外す。

   注 古いフィルタを取り外し、リサイクルセンターに持ち込むなど適切な方法で処分する。
7. 新しいフィルタを取り付ける。フィルタについている矢印がキャブレター **方向を指す**ように取り付ける。
8. 先ほどのステップ 5 で取り外したクランプでフィルタを固定する。
9. バッテリーを元通りに接続し、荷台を降ろす バッテリーを接続する (ページ 39)と 荷台を下げる (ページ 18)を参照。

カーボンキャニスタの整備

カーボンキャニスタ用エアフィルタの点検

整備間隔: 使用開始後最初の 50 時間

200運転時間ごと

カーボンキャニスタのエアフィルタの開口部を点検し、汚れていないこと、ごみや異物や通気の障害になるものが入っていないことを確認する図 45。

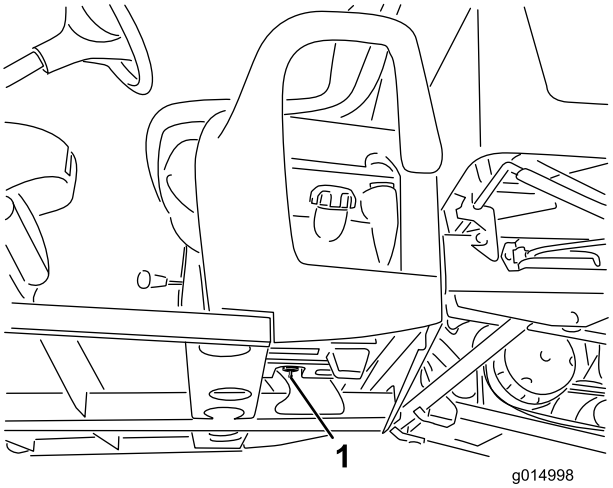


図 45

1. エアフィルタの開口部燃料タンク内側、カーボンキャニスタの下部分

カーボンキャニスタフィルタの交換

整備間隔: 使用開始後最初の 50 時間

200運転時間ごと

1. カーボンキャニスタの底部についているカーボンキャニスタ用フィルタのバーブ鋸歯フィッティングをホースから外し、フィルタを外す。

   注 外した古いフィルタは廃棄する。

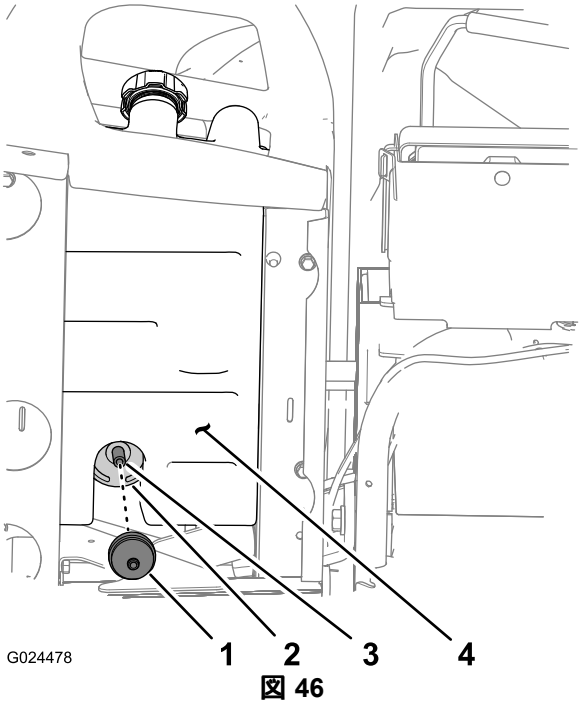


図 46

1. カーボンキャニスタフィルタ
2. カーボンキャニスタ
3. ホース
4. 燃料タンク

2. 新しいカーボンキャニスタ用フィルタのバーブ鋸歯フィッティングをホースに完全に挿入する。

電気系統の整備

バッテリーの整備

バッテリーの電圧 12 V, 300 CCA, @ -18° C (0° F)。

警告

カリフォルニア州
第65号決議による警告

バッテリーの電極部や端子などの部分には鉛や鉛含有物質が含まれており、カリフォルニア州では、これらの物質が癌や先天性異常の原因となるとされている。
取り扱い後は手を洗うこと。

⚠ 危険

電解液には触れると火傷を起こす劇薬である硫酸が含まれている。

- **電解液を飲まないこと、また、電解液を皮膚や目や衣服に付けないよう十分注意すること。安全ゴーグルとゴム手袋で目と手を保護すること。**
- **皮膚に付いた場合にすぐに洗浄できるよう、必ず十分な量の真水を用意しておくこと。**

- バッテリーはいつもきれいに、またフル充電状態に保持してください。
- バッテリーはいつもきれいに、またフル充電状態に保持してください。
- 端子部に腐食が発生した場合には、重曹水水重曹で清掃します。
- 清掃後は、腐食防止のためにバッテリー端子にワセリンなどを塗布してください。

バッテリーの接続を外す

⚠ 警告

バッテリー・ケーブルの接続ルートが不適切であるとケーブルがショートを起こして火花が発生する。それによって水素ガスが爆発を起こし人身事故に至る恐れがある。

- **ケーブルを取り外す時は、必ずマイナス黒ケーブルから取り外し、次にプラス赤ケーブルを外す。**
- **ケーブルを取り付ける時は、必ずプラス赤ケーブルから取り付け、それからマイナス黒ケーブルを取り付ける。**
- **バッテリー押さえは必ず取り付ける。**

⚠ 警告

バッテリーの端子に金属製品や車両の金属部分が触れるとショートを起こして火花が発生する。それによって水素ガスが爆発を起こし人身事故に至る恐れがある。

- **バッテリーの取り外しや取り付けを行うときには、端子と金属部を接触させないように注意する。**
- **金属製の工具をバッテリー端子に触れさせないよう十分に注意してください。**

1. バッテリーカバーを両側からを押すようにしてバッテリー上部からカバーを外す (図 47)。

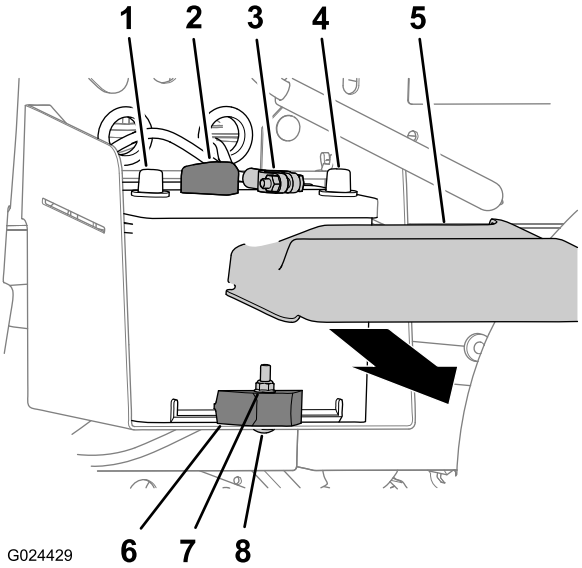


図 47

1.	バッテリーのプラス端子	5.	バッテリーカバー
2.	プラス ケーブル	6.	ロックナット
3.	マイナス-ケーブル	7.	バッテリークランプ
4.	バッテリーのマイナス端子	8.	キャリッジボルト

2. バッテリーのプラス端子からバッテリーケーブル を外す図 47。
3. バッテリーのマイナス端子からバッテリーケーブル-を外す図 47。

バッテリーの取り外し

1. バッテリーケーブルの接続を外す バッテリーの接続を外す (ページ 38)を参照。
2. バッテリーをバッテリートレイに固定しているロックナット、キャリッジボルト、バッテリークランプを外す図 47。
3. バッテリートレイからバッテリーを取り出す図 47。

バッテリーの取り付け

1. バッテリートレイにバッテリー載せる図 47。

   注 バッテリーのプラス端子とマイナス端子が図 47のように整列するように取り付けること。

2. バッテリークランプ、キャリッジボルト、ロックナットを使って、バッテリーをバッテリートレイに固定する図 47。
3. バッテリーケーブルを接続する バッテリーを接続する (ページ 39)を参照。

バッテリーを接続する

1. バッテリーケーブルプラスをバッテリーのプラス端子に接続する図 47。
2. バッテリーケーブルマイナスをバッテリーのマイナス端子に接続する図 47。
3. バッテリー上部に、バッテリーカバーを取りつける図 47。

バッテリーを充電する

⚠ 警告

充電中は爆発性のガスが発生する。

充電中は絶対禁煙を厳守。バッテリーに火気を近づけない。

重要 バッテリーは常時フル充電状態に維持してくださいこのとき電解液の比重は1.260 になります。特に、気温が氷点下0° C以下になる場合にはこれが非常に重要です。 .

1. 車体からバッテリーを取り外す バッテリーの取り外し (ページ 38)を参照。
2. 充電器に接続し、充電電流を 3-4 A にセットする。3-4 Aで4-8時間充電する12V。

   注 充電しすぎないように注意すること。

3. シャーシにバッテリーを取りつける バッテリーの取り付け (ページ 39)を参照。

バッテリーの保管

本機を30日間以上にわたって格納保管する場合には、バッテリーを機体から外して充電してください。充電終了後は、機体に取り付けて保存しても、機体から外したままで保存しても構いません。機体に取り付けて保存する場合は、ケーブルを外しておいてください。温度が高いとバッテリーは早く放電しますので、涼しい場所を選んで保管してください。バッテリーを凍結させないためには、完全充電しておくことが大切です。

ヒューズの交換

全部で3本のヒューズを使用しています。ヒューズはダッシュボードの下の運転席側に取り付けてあります(図 48)。

補助未使用	30 A
始動システム/ホーン	10 A
ヘッドライト	15 A
電源ソケット	20 A

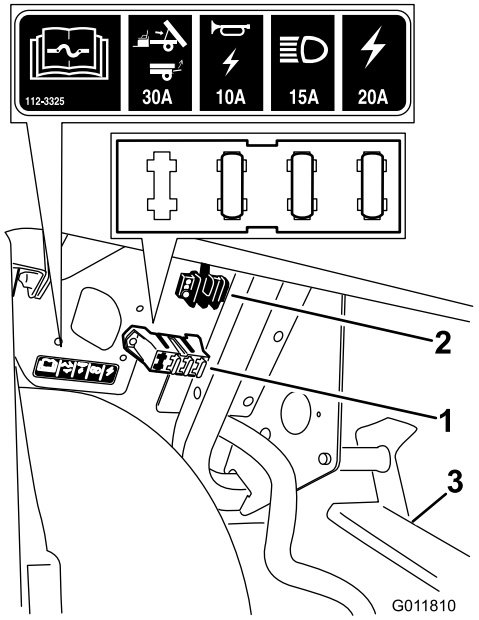


図 48

1. ヒューズブロック
2. アース端子ブロック
3. ペダル･アセンブリ

ヘッドライトの整備

電球の交換

⚠ 注意

ハロゲン電球は使用中に高温となる。 高温の電球に触れると手などに火傷を負う危険がある。

電球を交換する際には、必ず電球が十分に冷えてから作業に掛かること。電球の取り扱いには十分注意すること。

⚠ 注意

電球の表面を少しでも汚すと電球の破損や破裂の原因となり、一旦そのような事故が起こると安全上非常に問題である。

電球を取り扱う際には、透明の石英ガラス部分に直接手を触れないように、ペーパータオルなどを使い、ベース部分を持つこと。

仕様 *パーツカタログ*を参照。

1. バッテリーの接続を外す バッテリーの接続を外す (ページ 38)を参照。
2. フードを開ける フードを上げる (ページ 28)を参照。
3. ヘッドライトハウジングの裏側からきているランプ・アセンブリ用ハーネスコネクタを外す図 49。

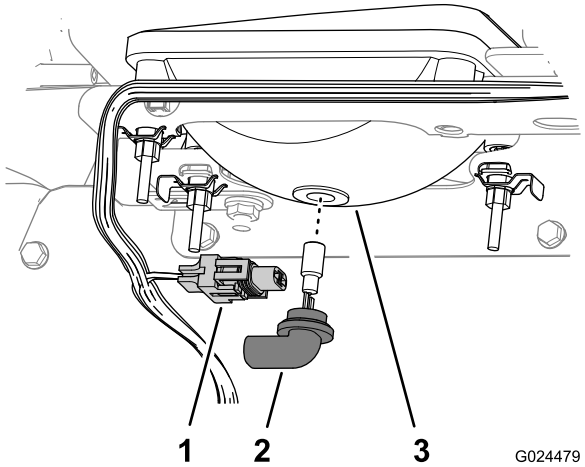


図 49

1. ハーネスの電気コネクタ
2. ランプ･アセンブリ
3. ヘッドライトハウジング

4. ランプ・アセンブリを左に1/4回転させて後ろに引き抜いてヘッドライトハウジングから取り出す図 49。
5. 新しいランプ・アセンブリとヘッドライトハウジングを入れ、ランプ・アセンブリについているタブをヘッドライトハウジングのスロットに合わせる図 49。

   注 新しい電球を取り付けるときに、ハロゲンランプに手を触れないように注意すること。
6. ランプ・アセンブリを右方向に 1/4 回転させて取り付ける図 49。
7. ハーネス用のコネクタを、新しいランプ・アセンブリのコネクタに接続する図 49。
8. バッテリーを元通りに接続し、フード降ろす バッテリーを接続する (ページ 39)を参照。

ヘッドライトの交換

1. バッテリーの接続を外す バッテリーの接続を外す (ページ 38)を参照。
2. フードを開ける フードを閉じる (ページ 29)を参照。
3. ランプ・アセンブリのコネクタから、ハーネス用のコネクタを外す図 50。

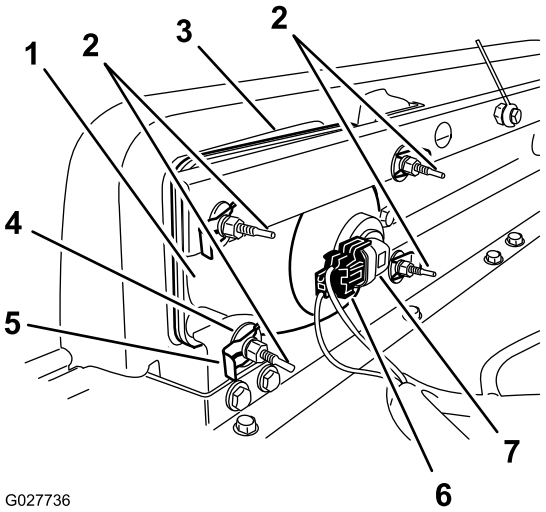


図 50

1. ヘッドライト
2. 調整ねじ
3. バンパーの開口部
4. 平ワッシャ
5. スピードクリップ
6. ハーネスの電気コネクタ
7. ランプ･アセンブリ

4. ヘッドライトをヘッドライトブラケットに固定しているスピードクリップとワッシャを外す図 50。

   注 取り外した部品はすべて新しいヘッドライトの取り付けに使用する。
5. ヘッドライト・アセンブリ全体を前に押出して、前バンパーから外す図 50。
6. 取り付け穴に新しいヘッドライトを取り付ける図 50。

   注 柱状の合いマーク突起がバンパー後部の取り付けブラケットの穴にそろうように取り付けること。
7. 先ほどステップ4で外したワッシャとスピード・クリップを使って、ヘッドライトアセンブリを固定する。
8. ハーネス用のコネクタを、新しいランプ・アセンブリのコネクタに接続する図 50。
9. ヘッドライトの向きの調整を行う ヘッドライトの調整 (ページ 41)を参照。

ヘッドライトの調整

ヘッドライト・アセンブリの交換や取り外しを行った場合には、以下の手順でヘッドライトの向きの調整を行ってください。

1. 始動キーを ON 位置にしてヘッドライドを点灯させる。
2. ヘッドライト・アセンブリの裏側部分にある調整ねじ (図 50) を回してヘッドライト・アセンブリの角度を変えてビームの方向を調整する。
3. バッテリーを元通りに接続し、フード降ろす バッテリーを接続する (ページ 39)を参照。

走行系統の整備

タイヤの保守

整備間隔: 100運転時間ごと—タイヤとリムの状態を点検する。

100運転時間ごと—ホイールナットのトルク締めを行う。

1. タイヤとリムの劣化・磨耗状態を点検する。

   注 運転中に縁石にぶつけるなどした場合、リムが破損したり、トーインが狂ったりする可能性がありますから、このような事故の後では必ず点検してください。

2. ホイールナットを 61-88 N·m9.7-14.5 kg.m=45-65 ft-lbにトルク締めする。

前輪のトーインとキャンバの調整

整備間隔: 100運転時間ごと/1年ごと いずれか早く到達した方—前輪のトーインとキャンバの点検を行う

重要 トロ社代理店から特殊工具TORO 6010を購入してください。

トーインは 06mm、キャンバは 0+1/2 度、すなわち、以下の条件において、車輪のリムの下部が上部よりも 2.3mm 内側に傾いているのが適正である

- タイヤの空気圧を点検し、前輪の空気圧が0.83bar 0.84kg/cm2に調整されていることを確認する。
- 運転席に人を着席させるか、運転士の平均的な体重と同じ重さのおもりを運転席に載せるかする。運転席に着席した人または運転士代わりのおもりは、以下の調整作業中、ずっと運転席にいる必要がある。
- 水平な床の上で、車両を 2-3 m まっすぐにバックさせた後、まっすぐ前に押して元の位置に戻す。これにより、サスペンションが通常の作動状態にセットされる。
- 前輪をまっすぐ前に向けた状態でトーインを測定する。

  1. キャンバを測定するには、直角定規の直角の角をタイヤの正面に接触させる図 51。

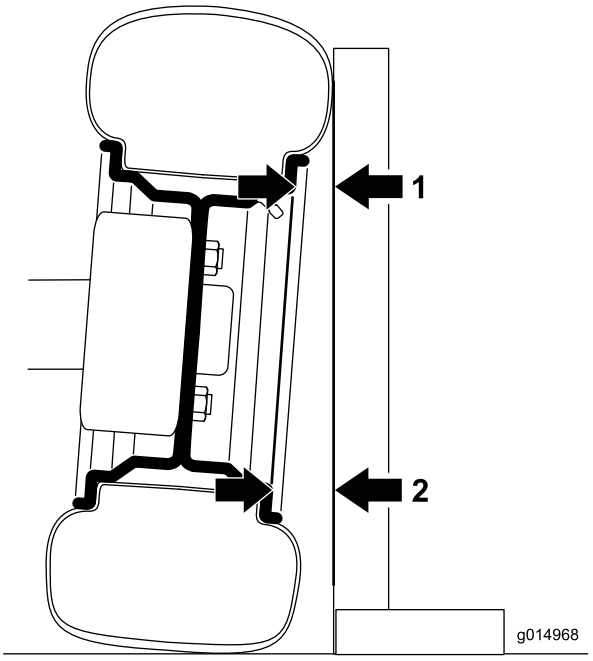


図 51

左前輪を前から見た図角度は実際よりも強調されて描かれている。

1. ここを測る
2. ここを測る 1 の測定よりも 2.3mm 大きければよい

2. タイヤから直角定規までの距離を、タイヤの上下でリムの同じ部分から測定する図 51。

   注 タイヤの下部における測定値が上部における測定値よりも 2.3mm 大きければ適正である。左右の前輪の測定をすべて終えてから調整を行う。

   調整の必要なタイヤそれぞれについて、以下の手順を全部行う

3. 特殊工具 TORO6010 を使って、ショックアブソーバのカラーを回転させてスプリングの長さを変更する図 52。
   - 下側の測定値が小さすぎる時は、スプリングの長さを短くする。
   - 下側の測定値が大きすぎる時は、スプリングの長さを大きくする。

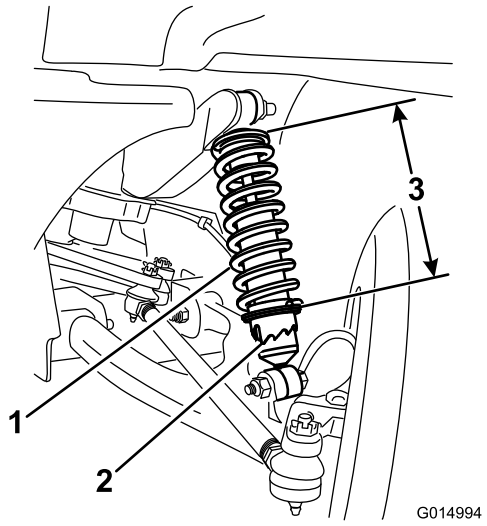


図 52

1. ショックアブソーバのスプリング
2. カラー
3. スプリングの長さ

4. 水平な床の上で、車両を 2-3 m まっすぐにバックさせた後、まっすぐ前に押して元の位置に戻す。
5. この手順を、ステップ 1 から、左右両輪でキャンバが正しくなるまで繰り返す。
6. 前輪の前と後ろで、左右のタイヤの中央線間距離を測る計測はアクスルの高さで行う(図 53)。

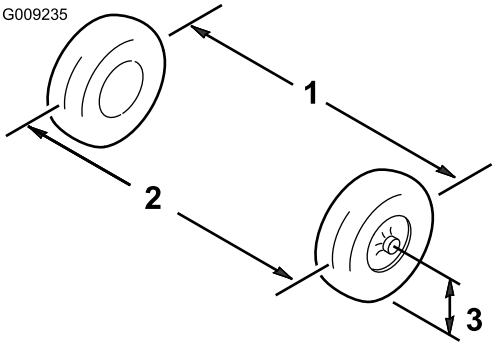


図 53

1. タイヤのセンターライン 後側
2. タイヤのセンターライン 前側
3. アクスルのセンターライン

7. 前後の測定値の差が所定範囲06mmにならない場合は、タイロッド両端のジャムナットをゆるめて調整を行う図 54。

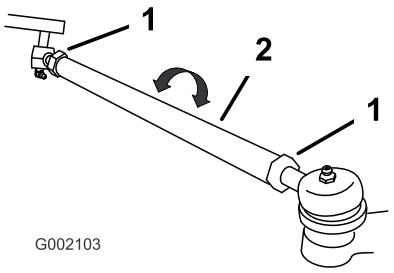


図 54

1. ジャムナット　　2. タイロッド

8. 両方のタイロッドを回して前タイヤを内向きまたは外向きに調整する。
9. 正しく調整できたら、タイロッドのジャムナットを締める。
10. ハンドルで右旋回と左旋回操作を行って、左右一杯までハンドルが切れることを確認する。

トランスアクスル･オイルの量の点検

整備間隔: 100運転時間ごと

オイルのタイプ SAE 10W30 API 規格 SJ またはそれ以上

1. 平らな場所に車両を移動し、エンジンを停止して駐車ブレーキを掛け、スタータキーを抜き取る。
2. 点検穴についているボルトを外す (図 55)。

   注 トランスアクスルのオイル量は、点検穴の下の縁まであるのが適正です。

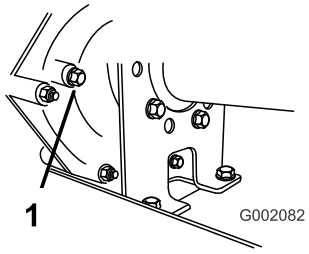


図 55

1. 点検穴

3. トランスアクスルのオイル量が点検穴の下の縁までない場合には、適切なオイルを補給する トランスアクスルオイルの交換 (ページ 43) を参照。

トランスアクスルオイルの交換

整備間隔: 800運転時間ごと/1年ごと いずれか早く到達した方

オイルのタイプ SAE 10W30 API 規格 SJ またはそれ以上

オイルの量 1.4 リットル

1. 平らな場所に駐車し、駐車ブレーキを掛け、ON/OFF スイッチを OFF にし、キーを抜き取る。
2. 補給口およびドレン口の周囲をウェスできれいにふき取る図 56。

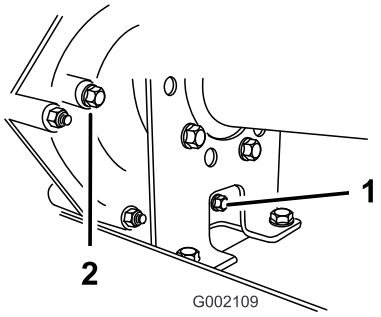


図 56

1. ドレンプラグ　　2. 補給プラグ

3. ドレンプラグの下に、容量2リットル以上の大きさのオイル受け容器をおく。
4. 補給プラグを左に回して抜きとる図 56。

   注 外した補給プラグとガスケットは、ステップ 8で取り付けるので捨てないこと。
5. ドレンプラグを左に回して抜きとる図 56。

   注 外したドレンプラグとガスケットは、ステップ 6で取り付けるので捨てないこと。

   注 トランスアクスルからオイルが完全に抜けるのを待つ。
6. ガスケットとドレンプラグを元通りに取り付ける図 56。

   注 廃油はリサイクルセンターに持ち込むなど適切な方法で処分する。
7. 補給口から、オイル溜め図 57に、所定のトランスミッションオイル約 1.4 リットルを入れる。これで補給口のねじ山の下位置までオイルが入る図 56。

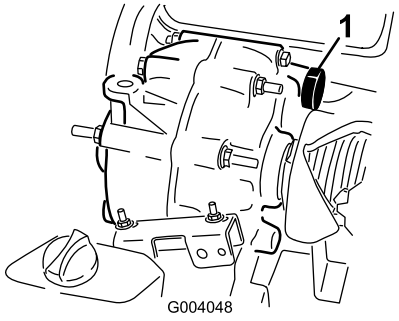


図 57

1. オイル補給口

8. ガスケットと補給プラグを元通りに取り付ける図 56。
9. エンジンを始動しウォームアップする。
10. オイルの量を点検し、ねじ山の下位置よりも下がっている場合には適宜追加する図 56。

ニュートラルの点検と整備

整備間隔: 100運転時間ごと

定期整備を行う時やエンジンの故障診断を行う時には、トランスアクスルをニュートラルにシフトしておく必要があります図 58。トランスアクスルをニュートラル位置にするにはシフト・レバーを操作します。以下の操作を行って、ニュートラル・シフト・レバーが正常に機能することを確認してください

1. シフト・レバーをニュートラル位置にする。
2. ニュートラルブラケットがニュートラル位置シフトブラケットの下にあるケーブル取り付けブラケットと面一になっていることを確認する図 58。

   注 この位置で、車両が前にも後ろにも動き出さないことを確認する。動き出す場合、ニュートラル・ブラケットをニュートラル位置まで手で動かして修正する。

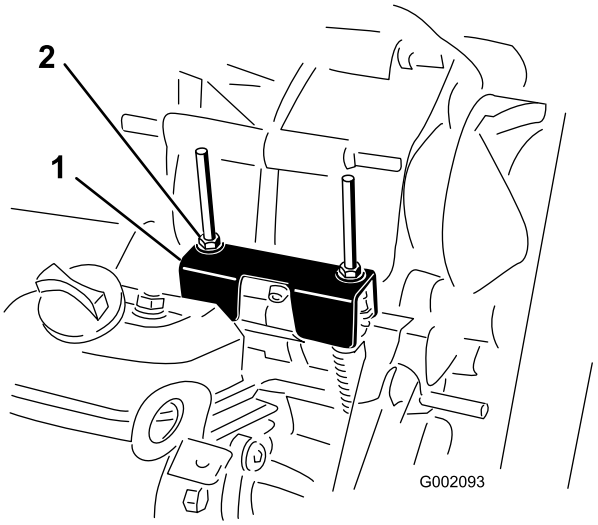


図 58

1. ニュートラル・ブラケット
2. ロックナット

3. ロックナットのひとつ図 58を回して、ナットワッシャの底面とニュートラルブラケットとの間のすきまが 0.761.52mm になるように調整する。

   注 ブラケット上部のロックナットを締め付ける時、ブラケット下のシャフトを手で押さえておく必要があります。

4. もうひとつのロックナットを回して、ナットワッシャの底面とニュートラルブラケットとの間のすきまが 0.761.52mm になるように調整する。
5. それぞれのシフトケーブルを引っ張って、ナットワッシャとニュートラルブラケットとの間に 0.761.52mm のすきまがあることを確認する図 59。

   注 すきまがない場合には、ナットを調整して 0.76-1.52 mm のすきまを作る。

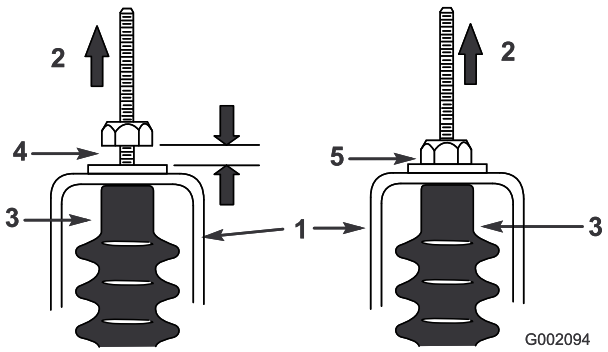


図 59

1. ニュートラルブラケット
2. 引っ張る
3. ケーブルカバー
4. 0.761.5mm のすき間
5. **悪い例** すきまが 0.761.52mm になるように調整する必要がある。

6. エンジンを始動し、前進、後退、ニュートラルにそれぞれシフトを何回か繰り返し、ニュートラルブラケットが適切に作動していることを確認する。

一次走行クラッチの整備

整備間隔: 400運転時間ごと/1年ごと いずれか早く到達した方

⚠ 注意

クラッチ内部にたまっているホコリが宙に舞って眼を傷めたり、喉に入って呼吸困難を起こす可能性がある。

安全ゴーグルやマスクなどの保護具を着用して作業すること。

1. 荷台を上げてラッチを掛ける 荷台を上げる (ページ 18)を参照。
2. クラッチカバーのボルト3本を外してカバーを取る(図 60)。

   注 カバーとねじは再取り付けするので捨てないこと。

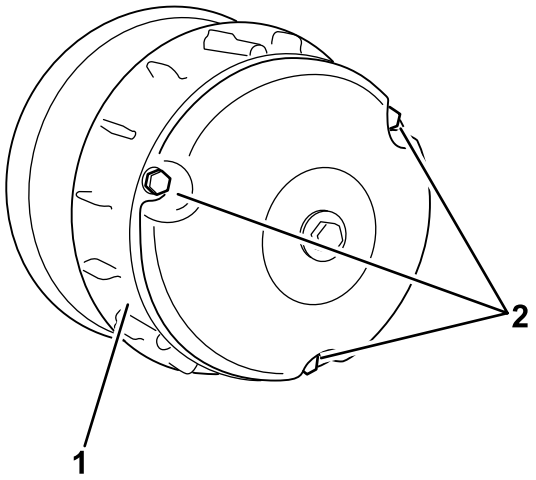


図 60

1. カバー　　2. ボルト

3. 圧縮空気を使って、カバー内部とクラッチ本体内部をていねいに清掃する。
4. クラッチカバーを元通りに取り付けて、ボルト3本図 60さきほど2で外したもので固定する。
5. 荷台を降ろす 荷台を下げる (ページ 18)を参照。

冷却系統の整備

エンジン冷却部の清掃

整備間隔: 100運転時間ごと 冷却系統を清掃する悪条件下で使用している場合には整備間隔を半分に縮める「特殊な使用条件化で使用する場合の保守整備について」の項を参照。

重要 回転スクリーンや冷却フィン詰まった状態、あるいは冷却シュラウドを外して運転するとオーバーヒートしてエンジンが損傷します。

重要 エンジンの清掃に圧力洗浄器を使うと燃料系統に水が混入する恐れがありますから、絶対に使用しないでください。

回転スクリーンと冷却フィンを清掃し、必要に応じて外部の洗浄も行ってください。

注 ほこりのひどい場所で使用する場合は、エンジンの冷却関連部分の清掃をよりひんぱんに行ってください。

ブレーキの整備

ブレーキの点検

整備間隔: 100運転時間ごと

ブレーキは極めて重要な安全装置です。他の安全装置と同様、定期的に入念に点検してください。

- ブレーキシューが磨耗や破損していないか点検する。ライニングパッドの厚みが 1.6mm以下となっている場合には、シューを交換する。
- ブレーキプレートなどに磨耗や変形が発生していないか点検する。変形を発見した場合は、該当部品を交換する。
- ブレーキオイルの量を点検する ブレーキオイル量の点検 (ページ 19)を参照。

駐車ブレーキのハンドルの調整

整備間隔: 200運転時間ごと

1. 駐車ブレーキレバーのゴム製グリップを外す図 61。

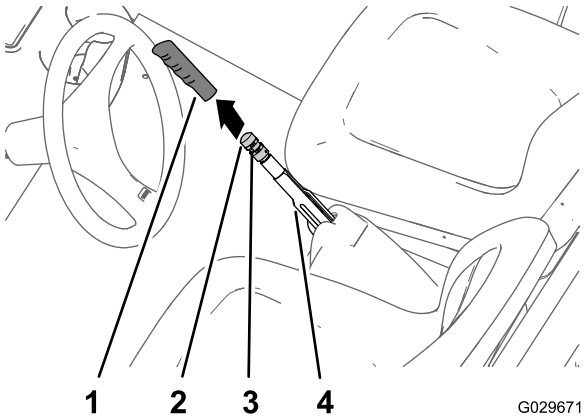


図 61

1. 取っ手
2. ブレーキ調整ノブ
3. 固定ネジ
4. 駐車ブレーキレバー

2. 駐車ブレーキレバーに調整ノブを固定している固定ねじをゆるめる図 61。
3. ブレーキレバーを操作するのに必要な力が 133156N·m 4.24.8kg.mとなるようにノブを回して調整する図 61。

   注 ノブを一杯まで回してもブレーキを掛けるのに必要な力が 133156N·m 4.24.8kg.mにならない場合は、ブレーキケーブルの調整を行ってください ブレーキケーブルの調整 (ページ 46)を参照。
4. 固定ねじを締め、ゴム製グリップを取り付ける図 61。

ブレーキケーブルの調整

1. 駐車ブレーキのゴム製グリップを外す図 61。
2. 駐車ブレーキレバーに調整ノブを固定している固定ねじをゆるめ図 61、駐車ブレーキをゆるめて、ブレーキ調整ノブをゆるめる。
3. 機体の下側で、駐車ブレーキケーブルのねじ山付きアジャスタの後ジャムナットを4回転ゆるめる図 62。

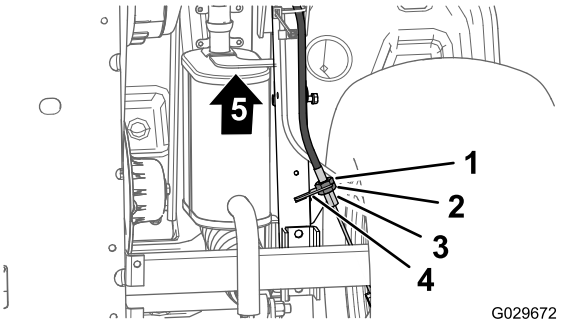


図 62

1. 前側ジャムナット
2. 後側ジャムナット
3. ブレーキケーブル用ブラケット
4. ねじ山付きアジャスタ駐車ブレーキのケーブル
5. 機体正面

4. 前側ジャムナットを締める図 62。
5. ブレーキを掛けるのに必要な力が 133156Nm 4.24.8kg.m = 3035ft-lbとなるようにノブ図 61を回して調整する。
   - ノブを**ゆるめて**ブレーキに必要な力を 133156Nm 4.24.8kg.m = 3035ft-lbとなるように調整することができない場合には、以下を行う
     A. ブレーキケーブルのねじ山付きアジャスタの前ナット図 62を1回転ゆるめる。
     B. 後側ジャムナット図 62を締める。
     C. ブレーキを掛けるのに必要な力が 133156Nm 4.24.8kg.m = 3035ft-lbとなるようにノブ図 61を回して調整する。
     D. ステップACを最大あと2回まで繰り返して、ブレーキに必要な力を133156Nm 4.24.8kg.m = 3035ft-lbに調整する。
   - ノブを**締めて**ブレーキに必要な力を 133156 Nm 4.24.8 kg.m = 3035 ft-lbとなるように調整することができない場合には、以下を行う
     A. ブレーキケーブルのねじ山付きアジャスタの後ナット図 62を1回転ゆるめる。

B. 前側ジャムナットを締める図 62。

C. ブレーキを掛けるのに必要な力が133156Nm 4.24.8kg.m = 3035ft-lbとなるようにノブ図 61を回して調整する。

D. ステップACを最大あと3回まで繰り返して、ブレーキに必要な力を133156Nm 4.24.8kg.m = 3035ft-lbに調整する。

注 上記のいずれの方法でも駐車ブレーキケーブルの調整を適切にできない場合には、ブレーキパッドが摩耗していないか点検してください。

- 固定ねじを締め、ゴム製グリップを取り付ける図 61。

ブレーキオイルの交換

整備間隔: 1000運転時間ごと

代理店に連絡する。

ベルトの整備

走行ベルトの整備

走行ベルトの点検

整備間隔: 使用開始後最初の 8 時間

200運転時間ごと

1. 平らな場所に駐車し、駐車ブレーキを掛け、ON/OFF スイッチを OFF にし、キーを抜き取る。
2. 荷台を上げ、支持棒で支える 荷台を上げる (ページ 18)を参照。
3. トランスミッションをニュートラルにセットする。
4. ベルト図 63を手で回転させながら、磨耗や破損がないかを点検する。

   注 ベルトの磨耗がひどい場合や、破損している場合は交換するを参照。

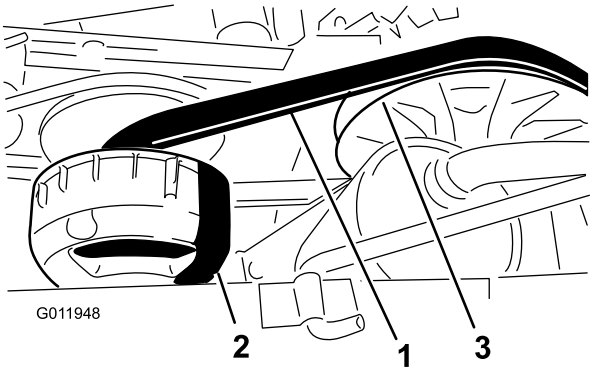


図 63

1. 走行ベルト
2. 次クラッチ
3. 2次クラッチ

5. 荷台を降ろす 荷台を下げる (ページ 18)を参照。

駆動ベルトの交換

1. 荷台を上げる 荷台を上げる (ページ 18)を参照。
2. ニュートラルにシフトし、駐車ブレーキを掛け、ON/OFF スイッチを OFF にし、キーを抜き取る。
3. 2次クラッチを回しながら2次クラッチ部分でベルトを外す(図 63)。
4. 一次クラッチからベルトを外す (図 63)。

   注 古いベルトは廃棄する。
5. 新しいベルトを一次クラッチに掛ける図 63。
6. 2次クラッチを回しながら2次クラッチ部分でベルトを外す(図 63)。
7. 荷台を降ろす 荷台を下げる (ページ 18)を参照。

スタータジェネレータベルトの調整

整備間隔: 使用開始後最初の 8 時間

200運転時間ごと

1. 荷台を上げる 荷台を上げる (ページ 18)を参照。
2. スタータジェネレータのピボットナットをゆるめる図 64。

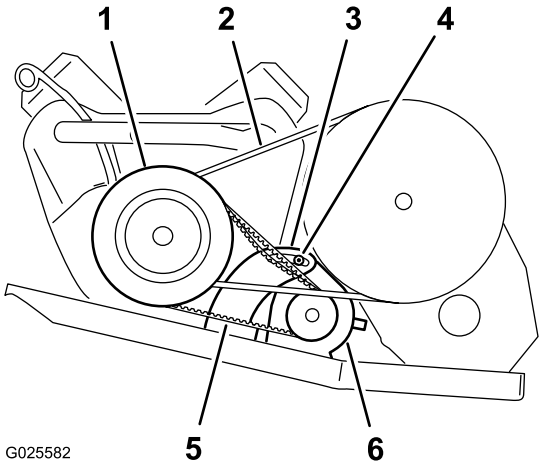


図 64

1. 走行用一次クラッチのハウジング
2. 走行ベルト
3. ジェネレータのピボットブラケット
4. ピボットナット
5. スタータジェネレータのベルト
6. スタータジェネレータ

3. エンジンのマウントとスタータとの間にバールをいれる。
4. バールを下に押してスタータを下げる。ベルトを 44N4.5kgの力で押した時のたわみが 6mm になるようにスタータの位置を調整する図 64。
5. ピボットナットを手締めし、バールを取り外す図 64。
6. ピボットナットを 88117N ·m9.011.8 kg.mにトルク締めする。
7. 荷台を降ろす 荷台を下げる (ページ 18)を参照。

シャーシの保守

荷台のラッチの整列調整手順

荷台のラッチが確実にはまらないと、走行するときに荷台が上下に振動します。このような場合には、ラッチのポストを調節して、荷台がシャーシにきれいに収まるようにしてください。

1. ラッチポストの端についているロックナットをゆるめる図 65。

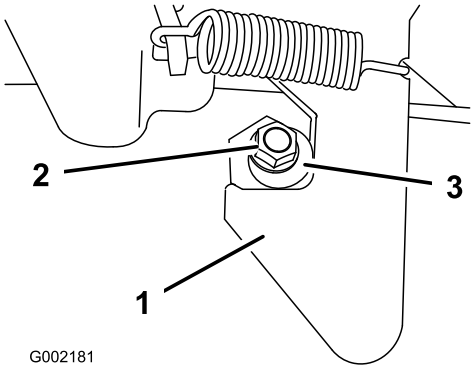


図 65

1. ラッチ
2. ロックナット
3. ラッチポスト

2. ラッチポストを右回りに回転させてラッチのフック部にちょうどはまるようにする図 65。
3. ロックナットを、 19.7 25.4Nm 2.0 2.6kg.m=175 225in-lb にトルク締めする。
4. 同様の方法ステップ13で機体の反対側でも作業を行う。

洗浄

車体を清掃する

必要に応じて洗車してください。柔らかい布などを使い、水または水と洗剤で洗浄します。ウェスを使えますが、フードの表面のツヤがなくなる場合があります。

重要 高圧洗浄機は使用しないでください。圧力洗浄機によって電装部や潤滑部に水が浸入すると、問題が起こりやすくなります。また、コントロールパネル、エンジン、バッテリー付近に大量の水をかけないようにしてください。

保管

1. 平らな場所に駐車し、駐車ブレーキを掛け、ON/OFF スイッチを OFF にし、キーを抜き取る。
2. エンジンのシリンダヘッドや冷却フィン、ブロアハウジングをふくめた車両全体を洗浄する。

   重要 機体は中性洗剤と水で洗うことができます。高圧洗浄機は使用しないでください。高圧の水で洗浄すると電気系統やグリス部へ水が浸入する恐れがあります。また、コントロールパネルやヘッドライド、エンジン、バッテリー部に大量の水をかけないようにしてください。
3. ブレーキを点検する ブレーキの点検 (ページ 46)を参照。
4. エアクリーナの整備を行う エアフィルタの整備 (ページ 32)を参照。
5. 機体のグリスアップを行う 潤滑 (ページ 29)を参照。
6. エンジンオイルを交換する エンジンオイルの交換モデル 07266TC と 07279 (ページ 33)と エンジンオイルの交換モデル 07273 と 07273TC (ページ 34)を参照。
7. タイヤ空気圧を点検する タイヤ空気圧を点検する (ページ 22)を参照。
8. 保管期間が 30 日間以上に及ぶ場合には、燃料系統に以下の整備を行う
   A. 燃料タンクの燃料に石油系スタビライザー/コンディショナーを添加する。

      重要 コンディショナ入りのガソリンでも90日間以上の保存はしないでください。

      混合手順は、スタビライザの説明書に従うこと。1 リットルあたり 8ml。

      重要 アルコール系のスタビライザエタノール系やメタノール系は使用しないでください。

      注 スタビライザは、新しい燃料に添加して常時使うのが最も効果的です。
   B. エンジンをかけて、コンディショナ入りのガソリンを各部に循環させる5分間。
   C. エンジンを停止し、エンジンの温度が下がるのを待ってガソリンを抜き取る。

      注 抜き取った燃料は地域の法律などに従って適切に処分する。廃油などはそれぞれの地域の法律などに従って適正に処分する。
   D. エンジンを再度始動するチョークを引いて始動し自然停止まで運転する。
   E. チョークを引く。
   F. 始動できなくなるまでエンジンの始動運転を続ける。

9. 点火プラグを外し、点検を行う 点火プラグの点検と交換 (ページ 35)を参照。
10. プラグの取り付け穴からエンジンオイルをスプーン2杯程度入れ、
11. スタータモータを使ってクランクを回転させて内部にオイルを十分に行き渡らせる。
12. 点火プラグを取り付けて規定値にトルク閉めする 点火プラグの点検と交換 (ページ 35)を参照。

    注 点火コードは取り付けないでください。
13. 車体からバッテリーを外し、フル充電する バッテリーの取り外し (ページ 38)を参照。

    注 保管期間中は、バッテリーケーブルを外しておいてください。

    重要 氷点0° C下での凍結破損を防止するため、バッテリーは必ずフル充電してください。 フル充電したバッテリーは周囲温度約 4° Cの条件下でほぼ 50 日間電圧を保持します。
14. 機体各部のゆるみを点検し、必要な締め付けや交換、修理を行う。破損個所はすべて修理する。
15. 機体の塗装がはげていればタッチアップ修理をする。

    注 ペイントは代理店で入手することができる。
16. 汚れていない乾燥した場所で保管する。
17. 保管中は ON/OFF スイッチからキーを抜き取り、子どもなどの手の届かない場所で保管する。
18. 機体にはカバーを掛けておく。

米国外のディストリビューター一覧表

ディストリビュータ輸入販売代理店	国名	電話番号	ディストリビュータ輸入販売代理店	国名	電話番号
Agrolanc Kft	ハンガリー	36 27 539 640	Maquiver S.A.	コロンビア	57 1 236 4079
Balama Prima Engineering Equip.	香港	852 2155 2163	丸山製作所株式会社	日本	81 3 3252 2285
B-Ray Corporation	韓国	82 32 551 2076	Mountfield a.s.	チェコ共和国	420 255 704 220
Casco Sales Company	プエルトリコ	787 788 8383	Mountfield a.s.	スロバキア	420 255 704 220
Ceres S.A.	コスタリカ	506 239 1138	Munditol S.A.	アルゼンチン	54 11 4 821 9999
CSSC Turf Equipment (pvt) Ltd.	スリランカ	94 11 2746100	Norma Garden	ロシア	7 495 411 61 20
Cyril Johnston & Co.	北アイルランド	44 2890 813 121	Oslinger Turf Equipment SA	エクアドル	593 4 239 6970
Cyril Johnston & Co.	アイルランド共和国	44 2890 813 121	Oy Hako Ground and Garden Ab	フィンランド	358 987 00733
Equiver	メキシコ	52 55 539 95444	Parkland Products Ltd.	ニュージーランド	64 3 34 93760
Femco S.A.	グアテマラ	502 442 3277	Perfetto	ポーランド	48 61 8 208 416
ForGarder OU	エストニア	372 384 6060	Pratoverde SRL.	イタリア	39 049 9128 128
ゴルフ場用品株式会社	日本	81 726 325 861	Prochaska & Cie	オーストリア	43 1 278 5100
Geomechaniki of Athens	ギリシャ	30 10 935 0054	RT Cohen 2004 Ltd.	イスラエル	972 986 17979
Golf international Turizm	トルコ	90 216 336 5993	Riversa	スペイン	34 9 52 83 7500
Guandong Golden Star	中国	86 20 876 51338	Lely Turfcare	デンマーク	45 66 109 200
Hako Ground and Garden	スウェーデン	46 35 10 0000	Solvert S.A.S.	フランス	33 1 30 81 77 00
Hako Ground and Garden	ノルウェイ	47 22 90 7760	Spypros Stavrinides Limited	キプロス	357 22 434131
Hayter Limited (U.K.)	英国	44 1279 723 444	Surge Systems India Limited	インド	91 1 292299901
Hydroturf Int. Co Dubai	アラブ首長国連邦	97 14 347 9479	T-Markt Logistics Ltd.	ハンガリー	36 26 525 500
Hydroturf Egypt LLC	エジプト	202 519 4308	Toro Australia	オーストラリア	61 3 9580 7355
Irrimac	ポルトガル	351 21 238 8260	トロ・ヨーロッパNV	ベルギー	32 14 562 960
Irrigation Products Int'l Pvt Ltd.	インド	0091 44 2449 4387	Valtech	モロッコ	212 5 3766 3636
Jean Heybroek b.v.	オランダ	31 30 639 4611	Victus Emak	ポーランド	48 61 823 8369

欧州におけるプライバシー保護に関するお知らせ

トロが収集する情報について
トロ・ワランティー・カンパニートロは、あなたのプライバシーを尊重します。この製品について保証要求が出された場合や、製品のリコールが行われた場合にあなたに連絡することができるように、トロと直接、またはトロの代理店を通じて、あなたの個人情報の一部をトロに提供していただくようお願いいたします。

トロの製品保証システムは、米国内に設置されたサーバーに情報を保存するため、個人情報の保護についてあなたの国とまったく同じ内容の法律が適用されるとは限りません。

あなたがご自分の個人情報を提供なさることにより、あなたは、その情報がこの「お知らせ」に記載された内容に従って処理されることに同意したことになります。

トロによる情報の利用
トロでは、製品保証のための処理ならびに製品にリコールが発生した場合など、あなたに連絡をすることが必要になった場合のために、あなたの個人情報を利用します。また、トロが上記の業務を遂行するために必要となる活動のために、弊社の提携会社、代理店などのビジネス・パートナーに情報を開示する場合があります。弊社があなたの個人情報を他社に販売することはありません。ただし、法の定めによって政府や規制当局からこれらの情報の開示を求められた場合には、かかる法規制に従い、また弊社ならびに他のユーザー様を保護する目的のために情報開示を行う権利を留保します。

あなたの個人情報の保管について
トロでは、情報収集の当初の目的を遂行するのに必要な期間にわたって、また法に照らして必要な期間法律によって保存期間が決められている場合などにわたって情報の保管を行います。

弊社はあなたの個人情報の流出を防ぎます
トロは、あなたの個人情報の保護のために妥当な措置を講ずることをお約束します。また、情報が常に最新の状態に維持されるよう必要な手段を講じます。

あなたの個人情報やその訂正のためのアクセス
登録されているご自分の情報をご覧になりたい場合には、以下にご連絡ください legal@toro.com.

オーストラリアにおける消費者保護法について

オーストラリアのお客様には、梱包内部に資料を同梱しているほか、弊社代理店にても法律に関する資料をご用意しております。

Toro 一般業務用機器の品質保証

年間品質保証

保証条件および保証製品

Toro 社およびその関連会社であるToro ワランティー社は、両社の合意に基づき、Toro 社の製品「製品」と呼びますの材質上または製造上の欠陥に対して、2年間または1500運転時間のうちいずれか早く到達した時点までの品質保証を共同で実施いたします。この保証は、エアレータ以外のすべての機器に適用されますエアレータ製品については別途保証があります。この品質保証の対象となった場合には、弊社は無料で「製品」の修理を行います。この無償修理には、診断、作業工賃、部品代、運賃が含まれます。保証は「製品」が納品された時点から有効となります。
*アワーメータを装備している機器に対して適用します。

保証請求の手続き

保証修理が必要だと思われた場合には、「製品」を納入した弊社代理店ディストリビュータ又はディーラーに対して、お客様から連絡をして頂くことが必要です。連絡先がわからなかったり、保証内容や条件について疑問がある場合には、本社に直接お問い合わせください。

Toro Commercial Products Service Department
Toro Warranty Company
8111 Lyndale Avenue South
Bloomington, MN 55420-1196

952–888–8801 または 800–952–2740
E-mail: commercial.warrnty@toro.com

オーナーの責任

「製品」のオーナーは、*オペレーターズマニュアル*に記載された整備や調整を実行する責任があります。これらの保守を怠った場合には、保証が受けられないことがあります。

保証の対象とならない場合

保証期間内であっても、すべての故障や不具合が保証の対象となるわけではありません。以下に挙げるものは、この保証の対象とはなりません

- Toroの純正交換部品以外の部品を使用したことまたはToroの純正部品以外のアクサセリや製品を搭載して使用したことが原因で発生した故障や不具合。これらの製品については、別途製品保証が適用される場合があります。
- 推奨された整備や調整を行わなかったことが原因で生じた故障や不具合。*オペレーターズマニュアル* に記載されている弊社の推奨保守手順に従った適切な整備が行われていない場合。
- 運転上の過失、無謀運転など「製品」を著しく過酷な条件で使用したことが原因で生じた故障や不具合。
- 通常の使用に伴って磨耗消耗する部品類。但しその部品に欠陥があった場合には保証の対象となります。通常の使用に伴って磨耗消耗する部品類とは、ブレーキバッドおよびライニング、クラッチライニング、ブレード、リール、ローラおよびベアリングシールドタイプ、グリス注入タイプ共、ベッドナイフ、タイン、点火プラグ、キャスタホイール、ベアリング、タイヤ、フィルタ、ベルトなどを言い、この他、液剤散布用の部品としてダイヤフラム、ノズル、チェックバルブなどが含まれます。
- 外的な要因によって生じた損害。外的な要因とは、天候、格納条件、汚染、弊社が認めていない燃料、冷却液や潤滑剤、添加剤、肥料、水、薬剤の使用などが含まれます。
- エンジンのための適正な燃料ガソリン、軽油、バイオディーゼルなどを使用しなかったり、品質基準から外れた燃料を使用したために発生した不具合。
- 通常の使用に伴う運転音や振動、汚れや傷、劣化。
- 通常の使用に伴う「汚れや傷」とは、運転席のシート、機体の塗装、ステッカー類、窓などに発生する汚れや傷を含みます。

部品

定期整備に必要な部品類「部品」は、その部品の交換時期が到来するまで保証されます。この保証によって取り付けられた部品は、この製品保証により保証期間終了まで保証され、取り外された部品は弊社の所有となります。部品やアセンブリを交換するか修理するかの判断は弊社が行います。弊社が保証修理のために再製造した部品を使用する場合があります。

ディープサイクルおよびリチウムイオン・バッテリーの保証

ディープサイクルバッテリーやリチウムイオン・バッテリーは、その寿命中に放出することのできるエネルギーの総量kWhが決まっています。一方、バッテリーそのものの寿命は、使用方法、充電方法、保守方法により大きく変わります。バッテリーを使用するにつれて、完全充電してから次に完全充電が必要になるまでの使用可能時間は徐々に短くなってゆきます。このような通常の損耗を原因とするバッテリーの交換は、オーナーの責任範囲です。本製品の保証期間中に、上記のような通常損耗によってオーナーの負担によるバッテリー交換の必要性がでてくることは十分に考えられます。
注リチウムイオンバッテリーについてリチウムイオンバッテリーには、その部品の性質上、使用開始後 3-5 年についてのみ保証が適用される部品があり、その保証は期間割保証補償額逓減方式となります。さらに詳しい情報については、*オペレーターズマニュアル* をご覧ください。

保守整備に掛かる費用はオーナーが負担するものとします

エンジンのチューンナップ、潤滑、洗浄、磨き上げ、フィルタや冷却液の交換、推奨定期整備の実施などは「製品」の維持に必要な作業であり、これらに関わる費用はオーナーが負担します。

その他

上記によって弊社代理店が行う無償修理が本保証のすべてとなります。

両社は、本製品の使用に伴って発生しうる間接的偶発的結果的損害、例えば代替機材に要した費用、故障中の修理関連費用や装置不使用に伴う損失などについて何らの責も負うものではありません。両社の保証責任は上記の交換または修理に限らせていただきます。その他については、排気ガス関係の保証を除き、何らの明示的な保証もお約束するものではありません。商品性や用途適性についての黙示的内容についての保証も、本保証の有効期間中のみに限って適用されます。

米国内では、間接的偶発的損害に対する免責を認めていない州があります。また黙示的な保証内容に対する有効期限の設定を認めていない州があります。従って、上記の内容が当てはまらない場合があります。この保証により、お客様は一定の法的権利を付与されますが、国または地域によっては、お客様に上記以外の法的権利が存在する場合もあります。

エンジン関係の保証について

米国においては環境保護局EPAやカリフォルニア州法CARBで定められたエンジンの排ガス規制および排ガス規制保証があり、これらは本保証とは別個に適用されます。くわしくはエンジンメーカーのマニュアルをご参照ください。上に規定した期限は、排ガス浄化システムの保証には適用されません。くわしくは、製品に同梱またはエンジンメーカーからの書類に同梱されている、エンジンの排ガス浄化システムの保証についての説明をご覧下さい。

米国とカナダ以外のお客様へ

米国またはカナダから輸出された製品の保証についてのお問い合わせは、お買いあげのToro社販売代理店ディストリビュータまたはディーラへおたずねください。代理店の保証内容にご満足いただけない場合は輸入元にご相談ください。